

南海産オオツタノハ製貝輪の分布圏から見た 彦崎貝塚出土資料の評価

田 嶋 正 憲

一 論 文 要 旨 一

史跡彦崎貝塚から分布圏外の中国・四国・近畿地方で初めてとなる縄文時代後期後半（彦崎K2式期）の南海産オオツタノハ製腕貝輪が出土した。カサガイの仲間オオツタノハは、縄文時代最高級の希少貝輪素材（生貝利用）の一つでその生息地は、大隅諸島～奄美大島と伊豆諸島の三宅島～八丈島・鳥島に限られる。しかもその住処は、隔絶した孤島崖下、黒潮の激流洗う苔生した岩礁の潮間帯中～下部、擬態による難攻不落の非視覚的領域である。そのため、各地の通常の近海産素材貝（死貝利用）製貝輪とは異なり、一種の呪術性に加え社会的な保有価値（威信性）が見出された。

今回、209遺跡1,391点以上を集成した。縄文遺跡は、約8：2で東日本に集中している。縄文時代は、130遺跡（東日本79遺跡、西日本51遺跡）137遺構から665点以上（東日本236点、西日本429点）出土している。さらに、早期末の使用開始期と後・晩期の盛行期が東西日本ではほぼリンクしており、特に後者は人口多寡に関係なく女性の多量着装習俗（地域差有）の共有化を契機とした多世代需要増による社会的現象であった。盛行期に多く住居を構え、製作石器類を保有する共通点は、まさにその実態を示している。検出遺構は、東西日本とも貝塚と洞窟遺跡の貝・包含層が多いが、土壙墓、再・改葬墓、住居、ピット、土坑、蓋付土器内埋納、一括など弥生・古墳時代の検出遺構が墓関連（土壙墓、再・改葬墓、横穴式石室、地下式横穴墓等）と貝・包含層へ二極化するのに対してバリエーションが多い点に特徴がある。蓋付土器内埋納や複数個体一括は、現時点で東日本でのみ検出された遺構である。一方、オオツタノハ製貝輪には形態的特徴から環状品と半環状品、それ以外の製品（垂飾・庇形・珠等）が認められる。しかも東西の素材供給地の遺跡からは、基本的に半環状品とその他製品が出土しない。特にその他製品は、南西諸島の事例が抽象的装飾意匠に富む傾向があり、その性質は弥生時代以降にも継続する。さらに、時期が下るにつれ発注者の南海産素材貝に対する嗜好性が顕在化する。また、縄文時代以来の多穿孔も継承され、一括や縄文晩期に出現し東日本にない特徴的な備蓄用の南海産素材貝集積遺構が展開する。つまり、縄文時代と弥生～古墳時代のオオツタノハ製貝輪は、異なる生業が存立基盤の社会的産物であるため嗜好・憧れ度、派生を含む素材ランク及びセット関係の地域的異同がある。

彦崎貝塚のオオツタノハ製貝輪は、伊豆諸島からもたらされた子ども用であった。さらにその発見は、盛行期の多様な搬入ルートとネットワークによる生産地と消費地との遠隔地間交換・分配構造及び地理学的な二つの貝の道を利用した縄文人とモノの交流と交易を紐解く鍵として一石を投じたと評価できる。

キーワード：彦崎貝塚、オオツタノハ、分布圏、縄文後期、盛行期、黒潮、貝の道、ネットワーク

はじめに

オオツタノハは、縄文時代の最高級希少貝輪素材でその住処は隔絶した孤島崖下、黒潮の激流洗う苔生した岩礁の潮間帯中～下部、擬態による非視覚的領域である。

2018年2月、「史跡彦崎貝塚から中国・四国・近畿地方初の南海産オオツタノハ製貝輪が出土」と報道発表後、一般公開した（岡山市教育委員会2018、田嶋2018）。分布圏空白地帯での出土は、「西の貝の道」、「東の貝の道」を巡る新たな地域研究の契機となった。

今回は、再実測を行い発見の経緯を述べて学史を繙き、一枚の日本地図上の遺跡分布図と集成を中心に現時点での評価を行う。なお、彦崎貝塚は、新型コロナ禍の下、2021年11月20日に最初の発掘調査から100周年の節目を迎える。

1. 発見に至る経緯

2003年、彦崎貝塚から国内外初の南海産硬骨魚類トウカイハマギギ骨が出土した。その後耳石も初検出し、それら層位試料を用い生態系と生業の復元研究を継続した（松井・大江・田嶋2011、大江・田嶋・真貝2016）。

一方、2015年4月から市民参加型の史跡彦崎貝塚親子体験講座「幻のさかな トウカイハマギギの骨を探そう！」を企画し通年で始動、現在も継続中である。2017

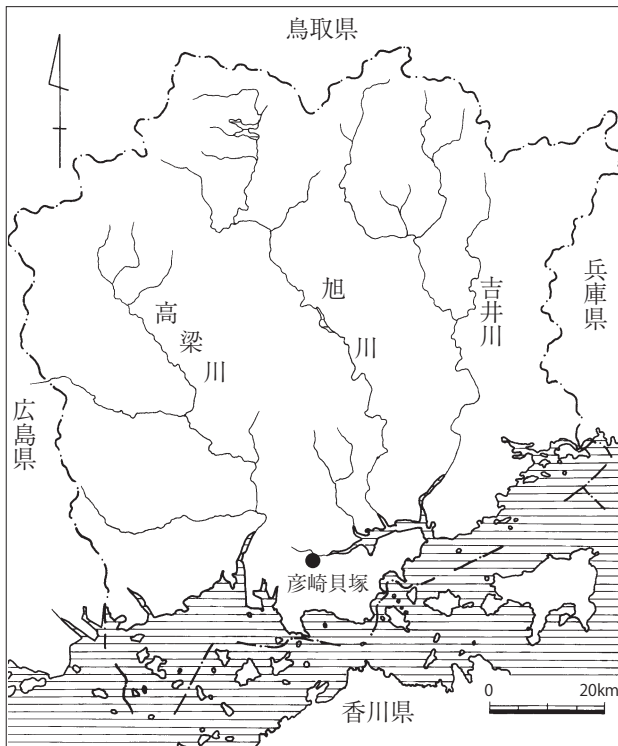


図1 彦崎貝塚位置図

年7月29日の夏休みスペシャルでは追加検出した⁽¹⁾。

また、同年10月3日～4日に黒住耐二氏が彦崎貝塚の微小貝調査で来岡された。調査終了後の夕刻、骨角器を見学中の黒住氏が突然、驚嘆の声をあげられた。「オオツタノハ製貝輪」が世に出た瞬間であった。

2. 研究史抄

彦崎貝塚は、岡山市の南部、南区彦崎字西ノ土井他に所在する。旧児島の北西岸に位置し、標高約163mの稲荷山から北に伸びる丘陵の先端、標高約6mの海岸段丘上に立地する。往時は、前面が児島湾であった。さらに、周辺の福田貝塚、船元貝塚、磯ノ森貝塚、舟津原貝塚（全て倉敷市）等とともに旧児島湾北西岸縄文貝塚群の一角を形成している。一方、彦崎貝塚は、遅くとも児島湾開墾後の大正時代には周知されていたが津雲貝塚等のように中央の学者による大々的な発掘調査は行われず、専ら地元研究者等の表面採集や坪掘りに留まっていた（東京帝国大学1930、末永・小林1935）。そして、彦崎貝塚の転機は、戦後しばらくして訪れる。

昭和23年5月、11月、同24年8月に鈴木 尚・酒詰仲男を中心とした東京大学理学部人類学教室の発掘調査によって約30体の土墳墓群（屈葬人骨）⁽²⁾と遺物（土器、石器、骨角器、動物遺存体、植物遺体等）が出土した。特に山内清男が出土した縄文土器を「彦崎前期1・2式」、「彦崎後期1・2式」として瀬戸内地方の基準資料に指定したことで全国的に知られる契機となった。

現在、彦崎貝塚は、2003・2004・2006年の範囲確認調査を経て国史跡の指定を受け（2008年3月28日）、恒久的な保護・保存・活用のための整備事業が始まった⁽³⁾。また、待望の発掘調査報告書（集文104、田嶋2007・2008・2013）と標本資料（山崎・高橋2007）も公刊された⁽⁴⁾。

明治考古学黎明期、我が国における装身具の記載は、明治18年（1885）2月、岡山出身の澤井 廉による古墳時代の勾玉に関するものが早い事例である（澤井1885）。また、貝塚発見の貝輪を初めて報告したのは、明治29年（1896）10月の八木熒三郎と林 若吉（樹）による「下総香取郡白井及貝塚村貝塚探究報告」が嚆矢とされている（八木・林1896）。一方、オオツタノハ製貝輪は、明治38年（1905）1月5日、今西 龍の神生貝塚（茨城県つくばみらい市）の調査報告が初見である（集文25）。ただ、種名の記載はなく特徴を捉えた挿図からの推察にとどまる（集文64）。また、大野延太郎（雲外）は、明治39年（1906）、貝輪を人骨着装用と推定した優れた論考「貝輪に就いて」を発表した（大野1906）。

岡山市出身の江見水蔭（忠功）は、明治40年（1907）から42年（1909）にかけ余山貝塚（千葉県銚子市）を調

査し大量の遺物を得た（**集文38**）。うち、完形のオオツタノハ製貝輪1点を大正5年（1916）に京都帝国大学文学部が購入した（**集文39**）。また、逆位状態で出土した安行2式の完形注口土器の中から小型貝輪（オオツタノハではない）15個と扇面形の魚尾骨が出土したことも重要である⁽⁵⁾。この貝輪は所在不明であったが、東京国立博物館に収蔵されていることが判明し、しかも完成品であった（**金子2009**）。一方、余山貝塚では、着装事例や完成品の割合が極端に少ない。阿部はそのことを重視し、小型完成品の存在は、余山貝塚が子どもから大人まで多世代に供給する巨大貝輪製作集落の証左であると考えた（**阿部2015**）。また、大野は同貝塚から大量に出土した多様な礫石器類を貝輪製作用の道具と推定し、先の見立て（**大野1906**）が津雲貝塚で実証されたと述べた（**大野1925**）。阿部は、大野と江見の貝輪に係る議論を学史的に評価する（**阿部他2013**）。

大正8・9年（1919・1920）、京都帝国大学が津雲貝塚（岡山県笠岡市）の発掘調査を実施した。結果、多量の土壌墓群や土器埋設群等が検出され、腰飾りや貝輪多量着装事例が認められた。清野謙次は、人骨と装身具を分類し、総合的に考察した（**清野1920**）。昭和3年（1928）、古作貝塚（千葉県市川市）で中山競馬場の建設中に貝輪入蓋付土器2個体が発見された⁽⁶⁾。ただ、発見年月日は不明である。その内の一号土器内（**図6-50-2**）には、ベンケイガイ製20点、オオツタノハ製9点、サルボオガイ製3点が入っており、しかも貝輪と土器の状態は極めて良好であった（**集文60**）。一方、大山

柏は、大正9年（1920）に伊波貝塚（沖縄県うるま市）を発掘し、多くの遺物と半環状片・片側穿孔品各1点を得た（**集文159**）。また、昭和7年（1932）6月、京都帝国大学の島田貞彦が崎樋川貝塚（沖縄県那覇市）の調査を行い、蝶形骨器と破片3点を得た（**集文163**）。昭和10年には、京都帝国大学の三宅宗悦が徳之島の喜念原始墓（鹿児島県大島郡伊仙町）を調査し、南西諸島初の三体の抜歯人骨（下顎骨）及び多数の貝輪や特徴的な底形製品等を得た（**集文131**）。これらは、南西諸島におけるオオツタノハ製貝輪・製品の早い報告である。昭和13年（1938）、八幡一郎は、広域に分布する特定産地遺物に着目して「縄文時代の交易」に関する初の総合的見解を示し、現在の研究に道筋をつけた（**八幡1938**）。昭和15年（1940）樋口清之は、腕飾りについて集成と総括を行い、「441. 下総柑中」として実測図を提示したもののオオツタノハ製とは明記しなかった（**集文26**）。後に遺跡名が訂正された（**集文64**）。昭和16年（1941）には、酒詰仲男が全国の貝輪出土遺跡集成を行い、環状（丙）、半環状（丁）に分類してツタノハ製7遺跡（堀之内貝塚、小豆澤貝塚、古作貝塚、津雲貝塚、上新宿貝塚、大境洞窟、琉球崎樋川貝塚）、オオツタノハ製2

遺跡（面縄第2貝塚、喜念原始墓）、カサガイ類1遺跡（洞口洞窟）をあげた（**集文48**）。

1946年清野は人骨着装遺物を集成した（**清野1946**）。1956年のココマノコシ遺跡（東京都三宅村）と1957年に始まった広田遺跡（鹿児島県熊毛郡南種子町）の発掘調査は、戦後オオツタノハ研究の出発点である（**金子1958**、**国分他1958**）。一方、（**酒詰1959**）と（**集文27**）は、全国の貝塚から出土の動物・魚類・鳥類・貝類遺体を網羅した基礎文献として現在も価値が高い。また、現在までにオオツタノハの生息地（素材供給地）問題、模造製品、分布と集成、機能・用途論、交流・交易論、実験等が議論されてきた。南島の貝の道、素材供給地に比べ（**三島1975**）、東日本の素材供給地は、考古学と貝類学で長いあいだ意見が異なった。すなわち前者が、一時南島としたが（**集文9**）、結果的に遺構と遺物から伊豆諸島に求めた（**金子1958・1975・1976・1984**、**橋口1988・1994・2001**、**集文64**）のに対して、後者が生物学的分布から否定的であった（**笹生・波部1976**、**黒住1994**、**佐々木・草刈・有馬・奥谷1994**）。しかし、長年にわたる忍澤の現生オオツタノハ実態調査によって、東日本は、伊豆諸島（三宅島～八丈島・鳥島）、南西諸島は、大隅諸島～奄美大島が素材供給地であると決着した（**忍澤・戸谷2001**、**忍澤2009・2010**）。ただ、鳥島での縄文遺跡は未確認である。

1980年今橋は、オオツタノハ製貝輪の特殊性について述べた中で、その波及期が堀之内1式と加曾利B式にあり、供給地を伊豆諸島に想定した上で、特に関東地方の貝輪入蓋付土器を所有する集落を分配拠点集落と考えた（**集文20**）。一方、堀越は、それを祭祀以外の未使用時の保管状態と考えた（**堀越1985・集文61**）。さらに、加工の程度やサイズの不統一性から共通の意味を探ることは不可能であるとして今橋説の見直しを指摘した（**集文64**）。また、忍澤は、搬出・搬入（輸送）形態と理解した（**忍澤2001**）。栗島は、冬木A貝塚の未報告の蓋付土器内貝輪や南高野貝塚等の一括資料に光を当て、貝輪の最終調整度から一次加工の陸揚げ用パッケージと内陸部への完成品（他素材貝輪を含む）搬出の再パッケージ化の保管状態と考えた（**集文23・257**）。一方、着装には、生涯一度も外さないという考え（**集文200**）と着脱可能で必要時に着装したという考え（**堀越1985**）がある。現在は、安川の伊川津貝塚資料⁽⁷⁾に基づいた内径長短比による成人用と子ども用の数値分析（**安川1988**）や阿部の貝輪製作と自己・他者補助着装実験による分析（**阿部他2013**、**阿部2019**）から、縄文後晩期の女性の多量着装という社会的要求が成長に伴う多世代の需要増加を促進したという後者の考えが支持されている。特に阿部が注目した内径総長の分析は、より細かい分析視点で重要である。また、同じ多量化現象は、同じ原理で土製

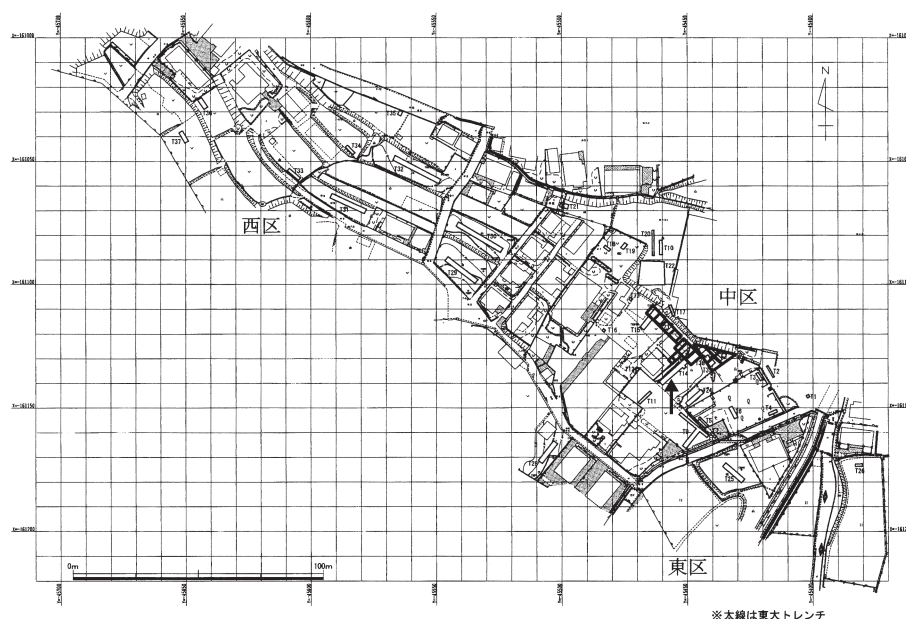


図2 彦崎貝塚トレンチ14位置図 (S=1/3,000)

耳飾りにも見られる。弥生時代の子ども用具輪は、木下が検討している(木下2005)。また、片岡は、貝輪着装人骨を集成し、検討を加えた(片岡1983)。

金子と忍澤は、以後指針となる骨角器の優れた分類と集成を行う中で骨角器研究史について貝輪を含む地域ごとの成果を総括した(金子・忍澤1986)。堀越は、オオツタノハ研究の現状と課題を総括した(集文64)。作山は、奥東京湾の遺跡群から出土した貝輪を時期・素材貝種別に整理し、オオツタノハの特異性をあげ、中期の主要貝輪素材である外洋性のイタボガキが後期になるとベンケイガイ製に変化することを指摘し、ベンケイガイ製貝輪が産地から離れるに連れて減少する現象を集落間の「交換モード」で説明できるとした(作山2000)。戸谷は、東日本における縄文時代～古墳時代のオオツタノハ製貝輪等出土93遺跡262点以上を集成した上で、他の交易性の高い貝製装身具との比較検討が不十分であること、詳細な時期、立地について十分言及されていないこと、出土状況や加工方法の検証が不十分であること、貝輪としての形状及び変遷の研究が少ないこと、使用法及び使用対象者が未解明であること等の問題点を指摘した(集文6)。当時の到達点といえよう。高城は、オオツタノハ(貝輪)形土製品と筒形土製品を検討し、前者が着脱可能で実用的側面をもち、オオツタノハ製貝輪分配ルート上の内陸拠点集落に集中していること、後者が墓(祭祀)関係から出土し、非日常的行為に採用されることから両者の用途・機能差を指摘した。しかも両者は、オオツタノハ製貝輪波及期の堀之内1式期に限定的な遺物であった(高城2003)。また、阿部は後者をベンケイガイ製貝輪連着(緊縛)状態の表現と理解し、貝輪が5

点程度の纏まりとして着装されたと考えた。そしてそれらを身につけた女性の数的差が成長過程の折々で威信を獲得した経過を階級的に表示したと理解した。さらにヒスイ大珠と貝輪は大局的な威信表示とし、後期中葉に終焉する大珠に代わり小型化したヒスイ珠類を組合せた連珠を貝輪多数着装と同義的である可能性を考えた(阿部2014)。また、佐藤は北海道の南海産貝類とその製品を集成した(佐藤2005)。

一方、南西諸島の貝輪習俗は、1977年の具志川島遺跡群岩立地区(沖縄県島尻郡伊是名村)出土の晩期初頭の男性

右手前腕にオオベッコウガサ製8個が着装された事例が初見である(沖縄県伊是名村教育委員会1979)。また、新里は、琉球列島の埋葬施設・葬法の転換期(縄文～弥生)とその貝製装身具を含む副葬品のセット関係を検討し、時期とエリアごとの差異と特性を整理した(新里2005, 集文136・251)。山野は、琉球列島の沖縄貝塚前期(I期:縄文時代相当)と後期(II期:弥生～古墳時代相当)のオオツタノハを含む貝製腕輪122遺跡1,572点を集成した⁽⁸⁾。そして、4エリア(I区:大隅諸島～トカラ列島, II区:奄美諸島, III区:沖縄諸島, IV区:宮古・八重山諸島)に分け考察を行った結果(IV区は貝輪習俗がない)、I期の各エリアは、近海産貝種を採用し、九州(フネガイ科・タマキガイ科7割採用)と異なること、近海産貝種の生息地の相違と獲得難易度が珊瑚礁の発達海岸地形の差等の自然地形に由来すること、II区におけるオオツタノハ主流の要因として、I区との交流または当時、奄美諸島でもオオツタノハが獲得できた可能性を指摘した(現在、奄美大島は供給地:筆者注)。一方、II期になると九州は、近海産が減少し、遠海産貝種(ゴホウラ・イモガイ・オオツタノハ等)が組成増加することから、弥生前期以降の九州と琉球列島との恒常的な交易の開始が影響し、III区におけるオオツタノハの増加やI区のオオツタノハからゴホウラへの変移のように琉球列島でも人とモノの移動が活発化したと考えた。また、I区以外は南海産貝輪を伴う埋葬が稀であり、その理由を琉球列島に獲得困難な貝輪素材(ゴホウラ・オオツタノハ)を珍重する習俗の可能性に求めた(山野2010)。ただ、II期は既に木下が指摘している(木下1996)。

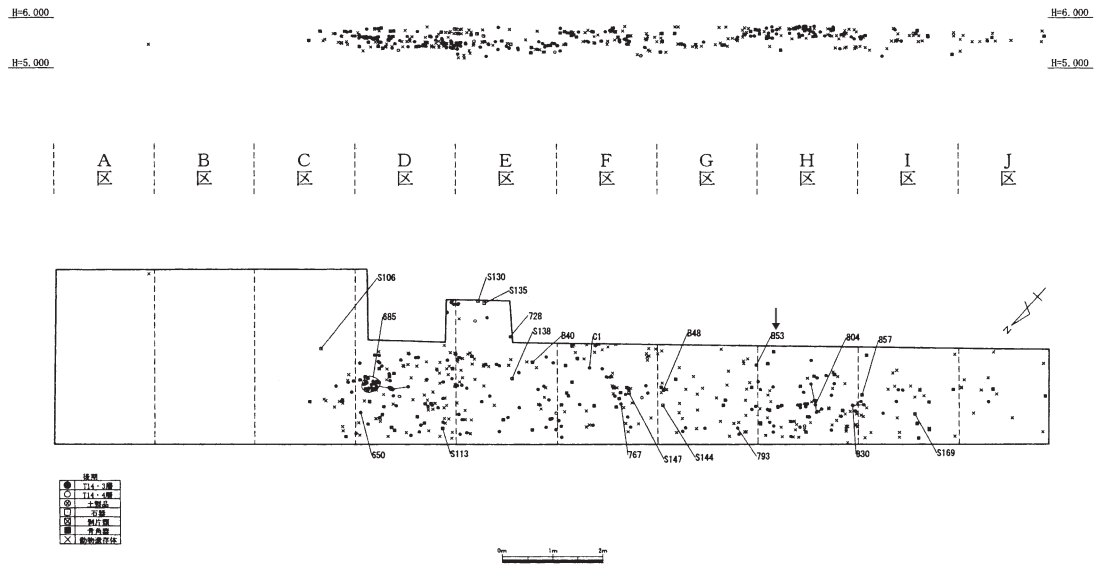


図3 T14遺物水平・垂直分布図 (S=1/150)

現時点でオオツタノハ製貝輪の生産遺跡は、「東西貝の道」の素材（生貝）供給地とそこに近接する遺跡に限られる。すなわち、東日本では、伊豆大島にある縄文時代後～晩期の下高洞遺跡D地区（集文75～77）、三宅島にある弥生時代中・後期のココマ遺跡（集文191）、西日本では、種子島西之表市にある小浜遺跡（縄文前期後半）、同南種子町にある一陣長崎遺跡（晩期後葉）、宝島十島村の大池A遺跡（中期前～中葉）、奄美大島奄美市の長浜金久第Ⅱ遺跡（後期中葉）、南さつま市高橋貝塚（弥生前期初頭）等である（集文252, 忍澤2020）。そして忍澤は、現地調査成果から縄文時代と弥生時代の素材獲得と流通の構造差を指摘した（忍澤2010）。一方、堀越は、出土遺跡の分布状況から房総半島ルートだけではなく、東京湾、三浦半島、伊豆半島等ルートの可能性も指摘した（集文64）。また、伊豆大島・下高洞遺跡D地区の福田K2式、新島・渡浮根遺跡の元住吉山Ⅱ式、宮滝式、八丈島・倉輪遺跡の北白川下層Ⅱc式・同Ⅲ式（彦崎Z2式）、大歳山式、鷹島式、「の」字状石製品及び奄美大島・宇宿小学校構内遺跡の津雲A式、沖縄本島・伊礼原E遺跡の船元Ⅱ・Ⅲ式は、オオツタノハ分布寡少地帯の中国・四国・近畿地方との人とモノの交流を追える重要な証拠である（集文75～78, 八丈町教育委員会1987・1994, 集文121, 北谷町教育委員会2010）。また、「の」字状石製品は、瀬戸内～関西圏では、里木貝塚（岡山県倉敷市）、瀬川遺跡（大阪府箕面市）で出土している（飯島・中山1989, 大竹1990・2011）。一方、橋口らは、早くからオオツタノハをはじめ広域に分布する先に具体的に述べた特殊な特定産地石材・素材、装身具、土器等に注目した全国対象の活発な議論を行っている（橋口編1999, 橋口2001）。

縄文時代の遺跡数は、東日本が約8：2で圧倒的に多く、当時の人口比率の東西差を反映している（水ノ江2017）。しかし、西日本でも早期末の東名遺跡（佐賀県佐賀市）、前期後半の小浜遺跡（鹿児島県西之表市）、前期後半の小竹貝塚（富山県富山市）、後期後半の彦崎貝塚でオオツタノハ製貝輪が検出されたことにより、出現期と盛行期が東西で同時現象の可能性のあることや分布圏寡少地の流通経路（貝の道）等新たな取り組みの必要性も見えてきた（集文91・105・108・109）。また、生息地の継続的な確認作業も重要で沖縄慶良間諸島では小型の生貝や遺体が確認⁽⁹⁾されている（黒住他2012, 忍澤2014, 集文166～168）。最近、西日本や南西諸島では、南海産貝製品を含む遺物（装身具等）の集成、先史時代の地域間交流をテーマに文化現象や遺跡遺物の動態から遠距離・近距離の交流・交易が活発に議論されている（沖縄考古学会2014・2019, 関西縄文研究会2006・2015, 九州縄文研究会2005・2012・2020, 中四国縄文研究会2011・2015, 集文263・264等）。一方、東日本でも豊富な資料に基づいた同様の趣旨の議論や研究等が活発に行われている（上條編2016, 栗島他編2019, 栗島編2019, 伊達大会実行委員会2014, 日本考古学協会2008年度愛知大会実行委員会2008, 集文99・100等）。また、弥生時代以降も広田遺跡やナガラ原東貝塚、ココマ遺跡等の総合的研究（集文191・216・222, 木下2020, 忍澤2020等）や東日本における山間部・沿岸部の洞窟遺跡や沿岸部集落遺跡の再埋葬等の出土事例の検討（集文171～173）、三浦半島の沿岸部洞窟遺跡出土事例と内陸集落との生産と流通の検討（杉山2014, 杉山編2019）、九州における古墳時代中期の地域首長層による南海産腕輪素材貝種の選択制の背景の検討（橋本

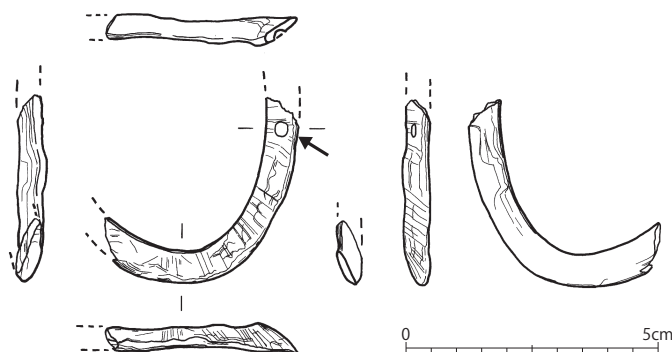


図4 彦崎貝塚のオオツタノハ製貝輪 (S=2/3)

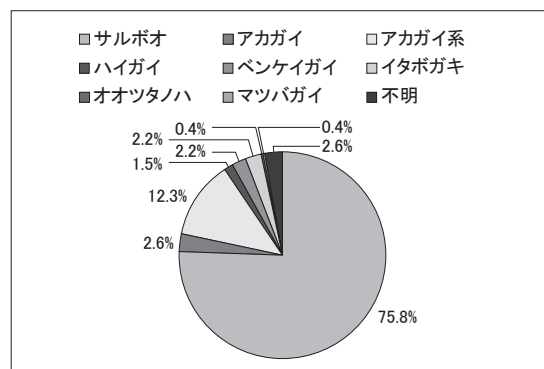


図5 岡山県下出土貝輪の素材割合図 (N=268)

2010・2018, 中村2020), 展示公開(集文260)等学際的研究成果が蓄積されつつある。

3. 彦崎貝塚のオオツタノハ製貝輪

貝輪(図4)は、彦崎貝塚調査地点の中調査区のトレンチ14(以下T14とする)のG区3層から出土した(図2・3)。遺物の水平垂直分布図のB53が出土位置である。T14のG区3層からは、後期後半の彦崎K2式を主体とする遺物群が検出されている。また、遺跡全体の各トレンチでは、当該期遺構としてピット群、土坑群、炉址群、動物遺存体埋納土器群、貯蔵穴群、土壌墓群が検出されている(田嶋2006~2008・2013, 山崎他2007)。

さて、この貝輪が本来の環状品であった場合、現状では全体の三分の一程度の残存になる。平面形態は倒卵形を呈していたと考えられる。残存部での環状部の断面形は長楕円形を呈する。色調は、背面の一部にオオツタノハに特徴的な鮮やかな薄桃色をとどめている以外は、腹面とも乳白色を呈する。残存部最大長4.62cm、環状部最大幅0.84cm、最大厚0.21cm、重量2.1gである。推定復元長約7cm、同最大幅・内径長約5cm程度。成人女性には装着が難しい規格に該当する。一方、内径側を含む背腹面ともよく研磨され、特に背面には研磨痕と光沢面が観察できる部分がある。また、オオツタノハにしばしば見られる周縁部のごつごつした鋸歯状端部、深い皺状の放射肋や虫喰孔等が本例では背面の一部に痕跡を留める程度に本地域の在地産貝輪と同様の丁寧な仕上げ研磨が施されている。つまり、最終研磨には、薄・厚仕上りの地域性がある。また、外面の右上部付近(図4矢印部)の紐通孔を背面から穿孔途中で作業中断した際にできた皿状の窪みには、回転研磨痕が認められる。これは、環状品から垂飾への再利用過程を示している。本貝輪は、子どものために取り寄せたものだろう。在地産と異なる素材の希少性と価値も遠隔地交流で認識していた。環状品が変形しても新たに加工してまで集落内で保持し続けたのは子どもへの哀惜の念だったのだろう。

4. 岡山県下出土縄文時代貝輪の特徴

現在、県下縄文貝塚の9遺跡で総数268点の貝輪が出土している⁽¹⁰⁾。内訳は、彦崎貝塚108点、津雲貝塚102点、里木貝塚32点、大橋貝塚8点、中津貝塚5点、磯ノ森貝塚6点、船倉貝塚と涼松貝塚が各3点、船元貝塚1点である。時期別では、前期115点、中期34点、後期17点、晩期102点で前期と晩期の事例が多い。また、素材は、サルボオ、アカガイ、アカガイ系⁽¹¹⁾、ハイガイ、ベンケイガイ、イタボガキ、オオツタノハ、マツバガイがある。出土総数に占める素材割合は、サルボオ76%、アカガイ3%、アカガイ系12%であり、この3種で91%を占める(図6)。時期ごとの傾向もほぼ同様である。よって縄文時代を通してサルボオ及びアカガイ系が県下の主要な貝輪素材として選択されたと考えられる。つまり、貝輪主要素材3種が貝塚を形成する貝層の主要組成貝種(食用)を構成しないのは、それらが打上げ貝でかつ貝輪専用素材として意識的に選別されていたからである。また、ベンケイガイ、オオツタノハ、マツバガイは、稀少素材である。具体的に見ると、県下の人骨着装15事例の貝輪は、里木貝塚のベンケイガイを除くと全て在地近海産貝素材を選択している(田嶋2018)。なお、中四国地方全体でも主要素材と希少種が同様であり、後期に遺跡数がやや増加する。管見では、鳥取県:1遺跡1点、島根県:4遺跡7点、山口県:1遺跡1点、広島県:15遺跡45点(内11遺跡31点が帝釈峡遺跡群)、香川県:1遺跡1点、愛媛県:4遺跡8点、高知県:1遺跡2点である。また、本地域最古の貝輪は、穴神洞遺跡等の早期中葉(黄島式)のサルボオ製である(長井2004)。

表1 縄文時代都道府県・時期別出土状況表

番号	都道府県名	出土遺跡総数	早期	前期				中期				後期				晩期			
		出土総点数	後葉～末	前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明
1	北海道	3										2						1	
		4										2						2	
2	岩手	3													1 (中～後)		1	1	
		4													1		1	2	
3	宮城	9		1								1		1		2	1	2	1 (後～晩)
		26		1								9		1		3	7	3	2
4	茨城	10				1				1	3	1	4			1			
		42				1				2	27	1	10			1			
5	千葉	31						3	4	2	3	2	9	2 (中～後), 1 (後前～末)				2	3 (後～晩)
		73						3	5	3	11	3	28	3			13		4
6	埼玉	2														1			1 (晩)
		4														3			1
7	東京	6											2	1 (後)		1			1 (後前～晩末), 1 (後～晩)
		43											3	6		1			33
8	神奈川	6	1				1		1		2		1						
		6	1				1		1		2		1						
9	静岡	3											2	1 (表探)					1 (晩)
		4											2	1					1
10	富山	1				1													
		1				1													
11	愛知	5														2	2	1	1 (後後～晩末), 2 (後～晩)
		29														5	3	1	20
12	岡山	2											1						1 (後～晩)
		2											1						1
13	福岡	1										1							
		1										1							
14	佐賀	2	1															1	
		12	7															5	
15	長崎	1																1	
		4																4	
16	熊本	1										1							
		1										1							
17	鹿児島	23		1	1			4		2	4	6	1			3	4		1 (縄文)
		333		1	未			19		9	102	137	2			15	47		1
18	沖縄	21				1		2			2	4	7	2 (後)		3	1	2	
		76				4		6			12	17	8	4		16	2	7	

※出土遺跡総数は、表9～12の都道府県別の遺跡数で集計。

時期別遺跡数は、遺構毎で集計しているため出土遺跡総数≠時期別遺跡総数となる場合がある。未：数値記載無し。

表2 縄文時代東西日本・時期別出土遺跡数一覧表

エリア	出土遺跡総数	早期	前期				中期				後期				晩期			
		後葉～末	前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明
東日本	79	1	1	0	2	1	3	5	3	11	3	19	6	7	4	7	11	
西日本	51	1	1	0	2	0	2	4	0	4	10	14	3	3	4	8	2	

表3 縄文時代東西日本・時期別出土点数一覧表

エリア	出土総点数	早期	前期				中期				後期				晩期			
		後葉～末	前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明	前葉	中葉	後葉	不明
東日本	236	1	1	0	2	1	3	6	5	51	4	45	11	13	11	21	61	
西日本	429	7	1	0	≤4	0	6	19	0	21	121	146	6	16	17	63	2	

表4 時代別出土遺構類型数一覧表

	1類	2類	3類	4類	5類	6類	7類	8類	合計
縄文	95	15	6	2	1	2	2	14	137
弥生	27	13	1	0	1	1	0	2	45
古墳	13	20	0	0	0	0	0	1	34
合計	135	48	7	2	2	3	2	17	216

5. まとめ

(1) 縄文時代のオオツタノハ製貝輪

A：分布

管見では、18都道府県130遺跡から665点以上が出土している（図6・表1）。以下、便宜上、東日本（北海道～愛知県）、西日本（愛知県以西～沖縄県）とする。

遺跡は、ほぼ沿岸部と内陸平野部に立地し、山岳地帯や山間部では見られない。遺物の性質上、概ね貝塚集中地域とリンクしている⁽¹²⁾。東日本では79遺跡の内、55遺跡が関東地方に集中し、さらに千葉県が31遺跡で全国最多である。西日本では51遺跡の内、44遺跡が南九州と南西諸島にあり、鹿児島県23遺跡（内、12遺跡が素材供給地の遺跡）、次に沖縄県21遺跡である。なお、九州地方東部、中国・四国・近畿地方、北陸～東北地方日本海側、道北は、分布圏外か分布寡少地域である（図6）。遺跡種別は、貝塚が最多で洞窟他が次ぐ（表7～10）。出土総点数は、東日本が234点以上、西日本が429点以上である。東日本の上位は、千葉県73点、東京都43点、茨城県42点、宮城県26点である。西日本は、鹿児島県333点、沖縄県76点、佐賀県12点である（表1）。

B：時期別の動向

オオツタノハ製貝輪の使用開始は、早期後葉～末である。縄文海進による対馬海流と黒潮の影響を受け東西日本ではほぼ同時に開始されたと推察される。また、前期初頭～前葉・後葉も遺跡数は少ないが、東西日本で同じ傾向にある。特に東日本では、早期末～前期初頭に宮城県まで運ばれており、伊豆諸島と関東地方南部の遺跡群との関係が注目される。鹿児島県庄貝塚事例は、轟式の南下と相関している。前期後半は、茨城県・富山県・鹿児島県・沖縄県で各1遺跡である。南西諸島は、全て曾畑式期であり、その南下と相関している。しかも鹿児島県小浜遺跡は、供給地における生産遺跡であ

り、さらに沖縄本島にまで到達している。当該期は、広域分布域圏の西関東の諸磯式、中国四国～東海地方の北白川下層Ⅱ式、九州地方の曾畑式等の展開時期とリンクする。

中期前葉は、千葉県3遺跡、鹿児島県2遺跡、同中葉は千葉県4遺跡、神奈川県1遺跡、鹿児島県4遺跡、同後葉は、千葉県2遺跡、茨城県1遺跡、西日本では見られない。房総半島及び東京湾東岸の千葉県の集落が安定的に関わりを持ち始めたと推察される。内陸流通の拠点となる茨城県の遺跡も後葉には参画するようになる点は重要である。一方、東京湾西岸の神奈川県の遺跡群も中期から関わりを持ち始め、三浦半島の集落との連携も模索され始めたと言えるだろう。西日本においては、東日本に比べると集落規模が特に小さく、それは、出土遺跡数にも一定程度反映されていると考えられる。鹿児島の2事例（宝島大池遺跡・大池遺跡A地点）は供給地遺跡である。ただ、中期後葉は、オオツタノハの出土事例がないだけで、中国・四国・九州地方では、圧倒的に鹿児島県の遺跡数が多い（田嶋2017）。しかも、瀬戸内の船元Ⅱ・Ⅲ式、東海の北屋敷式が南西諸島で出土している点は注目される（北谷町教育委員会2010、相美2014）。

後期の動向は、早期～中期までとは大きく異なり、東西日本ともに遺跡数と出土点数が増加する特徴がある。まさに盛行期である。前葉は、東日本11遺跡（千葉県・茨城県各3、神奈川県・北海道各2、宮城県1）、西日本4遺跡（鹿児島県2、沖縄県2）、中葉は、東日本3遺跡（千葉県2、茨城県1）、西日本10遺跡（沖縄県・鹿児島県各4、熊本県・福岡県各1）、後葉は、東日本19遺跡（千葉県9、茨城県4、東京都・静岡県各2、神奈川県・宮城県各1）、西日本14遺跡（沖縄県7、鹿児島県6、岡山県1）である。また、遺跡数の増加に連動して出土点数も増加している。画期は東日本では、前葉に茨城県27点、千葉県11点、宮城県9点、北海道2点、神奈川県2点、後葉に千葉県28点、茨城県10点、東京都3点、静岡県2点、神奈川県・宮城県各1点である。西日本では、中葉に鹿児島県102点、沖縄県17点、熊本県1点、福岡県1点、後葉に鹿児島県137点、沖縄県8点、岡山県1点である。後期のピークは、東日本が前葉と後葉、西日本が中葉と後葉である。中心地以外に拡大している点も東西日本で共通している。また、女性の貝輪多量着装習俗化による社会的要求から後期中葉以降に近海産貝素材による貝輪生産量が急激に上がるとされているが（阿部2014）、このことは最高級希少素材のオオツタノハ製にもあてはまる⁽¹³⁾。また、地域性はあるものの人口の多寡によらず東西日本で共有化された女性の貝輪多量着装習俗であったと考えられる。なお、西日本における鹿児島県の急激な増加は、供給地内での遺跡増加、市来式の南下、奄美系土器の北上・南下と連動している

と考えられる。忍澤は、その背景に捕獲難度と相対的な生息数にあると考えている。つまり、東の供給地に比べ、西の供給地は捕獲難度が相対的に低く、生息数が豊富という（忍澤2009・2010）。また、東西の供給地の島数及び列島間の視認距離の差及び黒潮の流路変動も影響している。

晩期前葉は、東日本7遺跡（宮城県・愛知県各2、茨城県・埼玉県・東京都各1）、西日本3遺跡（沖縄県3）である。中葉は、東日本4遺跡（愛知県2、岩手県・宮城県各1）、西日本4遺跡（鹿児島県3、沖縄県1）である。後葉は、東日本7遺跡（宮城県・千葉県各2、北海道・岩手県・愛知県各1）、西日本8遺跡（佐賀県・長崎県各1、鹿児島県4、沖縄県2）である。前葉と中葉で千葉県に遺跡がなく、愛知県と宮城県の沿岸部の遺跡群で晩期全般に安定的に認められる点が後期と異なる（表1）。また、当該期の瀬戸内と東海西部は鹿角製装身具の製作と使用面で共通点が多い（川添2019）。

C：検出遺構

検出された遺構は、8種類見られた。1類：包含層及び貝層、2類：埋葬遺構（土壙墓、石棺墓、再葬・改葬墓）、3類：堅穴住居、4類：（蓋付）土器埋納、5類：土坑、6類：柱穴・ピット、7類：一括集中、8類：その他（表採、寄贈など）。分類は、集成表に対応している。表4によると最多は、全体の70%を占める1類からの出土である。単体で出土する頻度が高いことがわかる。2類は全体の11%を占め15遺跡でみられる。土壙墓は、有珠モシリ遺跡16号合葬墓、中妻貝塚A32土壙墓、小竹貝塚C区45号人骨、伊川津貝塚6-2号墓、大友遺跡土壙墓、宇久松原遺跡第1号土壙墓で、石棺墓は大池B遺跡で見られる。着装事例は、有珠モシリ遺跡のA成人女性左前腕1点、同B抜歯あり成人女性左前腕1点（A・Bともベンケイガイ製とセット着装、胸上で前腕交差）、大友遺跡の熟年女性右前腕2点・左前腕3点、宇久松原遺跡の抜歯あり熟年女性両腕各2点（左右で着装方向異なる）のいずれも晩期末事例と大池B遺跡の熟年女性左手首3点（後期末～晩期末）の4遺跡5事例のみである。中妻貝塚A32土壙墓は、96体埋葬の再葬墓（堀之内2式）、荒木農道（小学校）遺跡（後期後半）、喜念原始墓（晩期末～弥生前期前葉）、喜念クバンシャ岩陰墓（晩期末～弥生前期前葉）、面縄第1貝塚（後期中葉）、具志川島遺跡群岩立遺跡西地区（中期末～後期前葉）も再・改葬墓と考えられる。南西諸島にやや多くみられる。3類は、上境旭台貝塚（後期後半）、曾谷貝塚D地点（後期中葉）、根木内貝塚（中期中葉）、大森貝塚（後期中葉～末）、岐志元村遺跡（後期中葉）、住吉貝塚（後期後半・晩期前半）の6遺跡11事例でみられる。住吉貝塚は6軒、上境旭台貝塚は2軒の住居から出土している。4類は、古作貝塚（堀之内1式）と冬木A貝

塚（堀之内1式）の2事例である。分配拠点集落としての性格、保管状態や輸送形態を示すと考えられる（**集文20**、堀越1985・**集文61**、忍澤2001、**集文23・257**）。西日本での事例はない。5類は、有吉北貝塚の土坑SK845（中期中葉）事例のみである。6類は、有吉北貝塚の住居SB96Bのピット2（中期中葉）、中野木新山遺跡のピット内廃棄貝層（中期後葉）の2事例である。7類は、南高野貝塚（堀之内1式）、加曾利南貝塚（加曾利B1～B3式）の2事例である。いずれも未成品であることから陸揚げ時のパッケージ状態と考えられている（**集文23・257**）。また、筒形土製品にみられる縦位の貝輪連着装緊縛表現や面縄第1貝塚、具志川島遺跡群岩立遺跡西地区等の貝輪の紐擦れ痕の存在から複数個体が一単位で緊縛され、動物の皮、樹皮、植物繊維等による袋状容器に入った状態で陸揚げされたと推察される。7類も4類同様に西日本では明確な事例はないが、喜念原始墓で3・4個重畳して出土したと記述があるので可能性を残す（**集文131**）。8類は、表面採集や寄贈によって得られた資料である。

D：環状品

環状品には、完成品、破片、未成品、多孔品、素材がある。完形は、47遺跡（東日本23、西日本24）、未成品は21遺跡（東日本9、西日本12）、破片は、74遺跡（東日本42、西日本34）で認められる。養安寺遺跡の1点には赤彩がみられる（**集文42**）。ただ、近海産ハマグリ製貝輪周縁に複数の連結撥形紋の外郭四周をベンガラ塗布して連続紋様とする加曾利貝塚例、黒漆を塗った土製腕輪側面に赤漆で対向半円紋を描出したり、木製腕輪に黄褐色漆を彩る是川遺跡例もある（樋口1952）。また、鳥取市布勢第1遺跡から漆塗り木製腕輪が出土している（中野編1981）。多孔品は、喜念原始墓で1点出土している。図7-62-1、64に近い形態と思われる。素材は、生産遺跡である伊豆大島・下高洞遺跡D地区、種子島・小浜遺跡、宝島・大池遺跡A地点で出土している。後二者は、供給地の遺跡である。各形態は、①素材捕獲（選択的大型品）→②現地第一次加工（環状荒加工・輸送）→③陸揚げ（搬入）→④第二次加工（完成品）→⑤流通（搬出再パッケージ）→⑥使用（再利用）→⑦廃棄の諸段階を示す。②には、殻表不純物・可食部除去処理も含まれる。なお、神野貝塚から小型「ツタノハ製」の図7-75類似品が出土している（**集文141**）。また、少数だが中妻貝塚（堀之内2式）と具志川島遺跡群岩立遺跡西地区（中期末～後期前葉）の被熱事例（**集文31・147**）、伊川津貝塚（晚期中葉）のイタボガキ左殻製オオツタノハ模倣貝輪（**集文101**）、大池遺跡B地点（後期末～晩期末）の白色嗜好のオオツタノハ製ゴホウラ模倣貝輪（**集文264**）、藤岡神社遺跡（堀之内1式）の白色顔料塗布オオツタノハ貝輪形土製品（財団法人とちぎ

生涯学習文化財団2001）も縄文人の特定高級素材貝輪の扱い方とそれに対する「憧れ度」の地域性をうかがい知る事例として重要である。元来、装身具のトータルコーディネートに拘る縄文人だった（田嶋2018）。一遺跡の出土点数は、南高野貝塚14点（未成品）、冬木A貝塚12点（完成品）、古作貝塚9点（完成品）が時期のわかる上位の事例である。

E：半環状品

34遺跡（東日本23、西日本11）みられる。組合せや単独で使用された（一遺跡の上位は具志川島遺跡群岩立遺跡西地区の10点、西広貝塚の5点）。穿孔位置と数に違いがある。①片側1ヶ所：15遺跡（東日本8、西日本7）、②片側2ヶ所：2遺跡（東日本1、西日本1）、③両端1ヶ所：19遺跡（東日本16、西日本3）、④両端2ヶ所：2遺跡（東日本1、西日本1）、⑤周縁3ヶ所：3遺跡（東日本1、西日本2）、⑥周縁4ヶ所：2遺跡（西日本2）、⑦周縁5ヶ所：2遺跡（西日本2）である。なお、富崎貝塚からは、片側2ヶ所+片側1ヶ所穿孔品が1点出土している（図6-8、**集文11**）。ただ、破損品は断定が難しく①は、本来③であった可能性が高い。同様に②も垂飾と④だった可能性も残す。両端1ヶ所穿孔が東日本に、周縁多穿孔が西日本（南西諸島）に多い傾向である。また、神生貝塚、上新宿貝塚（図6-55）、八木原貝塚（図6-42）例には、赤彩が認められる。一方、西日本では事例がない北野原遺跡（称名寺Ⅱ～堀之内1式）の穿孔部まで忠実に模倣した半環状腕輪形土製品も注目される（財団法人市原市文化財センター2000）。なお、北野原遺跡と谷を挟んで近接する祇園原貝塚からは、オオツタノハ製貝輪（環状品と半環状品）が出土しており（**集文50**）、集落間に製品保有形態の差が認められる。また、東日本では、オオツタノハとセット関係にある南海産貝製品を忠実に象った土製品が多く出土している（忍澤2004a）。

F：その他製品

オオツタノハを利用した貝輪以外の製品も少数ながら出土している。①垂飾（方形貝玉）が里浜貝塚（晚期中葉）で1点出土している（図6-12-2）。破損品を再利用したものと考えられる。②庇形製品が徳之島の喜念原始墓（晩期末～弥生前期前葉）で8点、喜念クバンシャ岩陰墓（晩期末～弥生前期前葉）で1点、面縄第1貝塚（後期中葉）で1点（図6-104-1）、沖永良部島の犬田布貝塚（後期後半～晚期中葉）で1点出土している。供給地以外での事例である。③穿孔途中不明未製品が沖永良部島の神野貝塚（後期中葉）で1点出土している。また、基本的に東西日本の供給地の遺跡から半環状品とその他製品が出土しない点が注目される（表9～12）。

G：竪穴住居と貝輪製作関連石器

貝輪出土竪穴住居の実数は、先述のC節を参照。大野

表5 彦崎貝塚の搬入遺物一覧表 (網掛けは彦崎貝塚から出土した土器型式)

1: 四国香川, 2: 近畿, 3: 四国徳島, 近畿和歌山・三重, 4: 岡山県北西部 (高梁市成羽町), 5: 岡山県南西部 (倉敷市玉島), 6: 山陰〜北陸, 7: 大分県姫島, 8: 島根県隠岐の島, 9: 北陸, 10: 韓半島, 九州北西部〜南部, 11: 渚美半島, 12: 三半島, 御蔵島〜八丈島・鳥島, 大隅諸島, トカラ列島・奄美大島, 13: 中部瀬戸内, 14: 台湾西部以南, 15: 九州・山陰〜北陸, 東海・関東, 16: 西部九州内, 17: 東北九州, 18: 近畿, 19: 西関東, 20: 東関東, 21: 東海西部, 22: 中部, 23: 北部九州, 24: 台湾四国

す事例は、西日本では少ない。言わば、人口多寡による構造と地域差である。また、中国四国地方の集落は小規模であり住居址も少ない。そのため山間部の帝釈峡遺跡群（発住者・消費者）と瀬戸内沿岸貝塚群（生産者・搬入者）との少ない状況証拠から見た貝輪生産と流通は、大雑把に前期前半は島根半島・松永湾貝塚、前期後半～中期は旧児島湾北西岸貝塚群、後～晩期は旧児島湾北西岸貝塚群・高梁川河口域貝塚群・笠岡湾岸貝塚群・福山湾岸貝塚群・松永湾岸貝塚群・沼田川（三原市）河口域貝塚からもたらされたと推察するに留まる。さらに、前中期と異なり後晩期は、生産遺跡が増加傾向であり、後者の新規貝塚は全国的な傾向から見て貝輪生産盛行期との関わりで出現したと理解できる。なお、瀬戸内沿岸貝塚群は、涼松・里木・船元・中津・津雲等の着装事例か

ら生産者と消費者を兼ねていた。

H：イモガイ・タカラガイ・ゴホウラとのセット関係

東日本では、縄文時代のゴホウラ製品（貝輪・垂飾等）は、出土していない。イモガイ・タカラガイ製品とのセット関係は、28遺跡で見られた。早期末の吉井城山第一貝塚の事例（イモガイ垂飾）が最古で後期がもつとも多い。3種セットは5遺跡でみられ、生産遺跡の下高洞遺跡D地区も含まれる。供給地は、房総半島、三浦半島、伊豆諸島である。西日本では、ゴホウラ製品（貝輪・垂飾等）、イモガイ製品（貝輪・垂飾等）、タカラガイ製品（垂飾等）とのセット関係は23遺跡でみられた。なお、ゴホウラ製品は、九州島でも確実な縄文時代の事例はない。早期末の東名遺跡のイモガイ製品（垂飾）、タカラガイ製品（垂飾等）3種セットが最も古い。

表6 弥生～古墳時代都道府県別出土状況一覧表

番号	都道府県名	出土遺跡総数	弥生前期				弥生中期				弥生後期				古墳時代							7世紀			8世紀			9～10世紀	不明
		出土総点数	前葉	中葉	後葉	前期	前葉	中葉	後葉	中期	前葉	中葉	後葉	後期	初頭	前期	4C末	中期中葉	中期	後期6C	6C後17C初	前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉		
1	宮城	1																			1								
		1																			1								
2	群馬	2					2																						
		36					36																						
3	茨城	2							2																				
		10							10																				
4	千葉	6									1									1		1	1	1	1				
		14									1									1		2	2	4	4				
5	神奈川	9					1		1		3				1					4									
		15					1		1		3				2					8									
6	東京	1									1																		
		157									157																		
7	富山	1						1																					
		≦2						≦2																					
8	福井	1															1												
		1															1												
9	岡山	1					1																						
		1					1																						
10	広島	1								1																			
		3								3																			
11	島根	2								2																			
		4								4																			
12	福岡	2				1	1																						
		8				7	1																						
13	佐賀	1				1																							
		23				23																							
14	長崎	3				1				1				1															
		4				2				1				1															
15	大分	1																1											
		12																12											
16	宮崎	7																5	1	1									
		42																36	2	4									
17	鹿児島	21	2				1			1	1			4	1	1			2		5							1 (6～10C), 1 (7～9C)	4
		296	10				3			3	4			4	23	1			220		9							14	8
18	沖縄	18					1		1		2			2					8	1		1						1 (弥～古), 1 (弥後～8C)	1
		97					4		1		6			5					46	17		2						5	11

※出土遺跡総数は、表13～15の都道府県別の遺跡数で集計。時期別遺構数は、遺構毎で集計しているため、出土遺跡総数≠時期別遺構総数となる場合がある。

オオツタノハ製貝輪とゴホウラ製貝輪の2種セットは、宝島・大池遺跡A地点（中期前～中葉）を北限に奄美諸島8遺跡、沖縄諸島4遺跡で見られる。後期中葉～後葉が多い。オオツタノハ製貝輪、ゴホウラ製貝輪、イモガイ製貝輪の3種セットは、面縄第2貝塚（後期中葉）、ナガラ原第3貝塚（後期後葉～晩期）、古座間味貝塚（後期中葉～後葉）の3遺跡で認められた。4種セットは5遺跡で見られ、うち4遺跡が沖縄諸島の遺跡である。供給地は奄美大島以南で南に行くほど素材貝種が増加する（山野2010）。オオツタノハ製貝輪とのセット関係も立地（素材の生息環境）を反映していることがわかる。一方で縄文時代に南西諸島のオオツタノハが九州島から日本列島日本海側、北海道南部へ展開するのに対してゴホウラ製品の特殊性も浮き彫りになった。ただ、セット関係はないが弥生時代相当の有珠モシリ遺跡では、ゴホウラ製垂飾（4号改葬墓）とイモガイ製横型貝輪（7号改葬墓）が出土している（集文1）。また、東京の西ヶ原貝塚（縄文後期）のヤコウガイ製貝匙1点は、南西諸島からもたらされた希少品である（集文72）。早期末のセット利用の開始と後期の多セット化も東西日本でリンクしている。なお、イモガイ・タカラガイ製垂飾の利用は全国的にオオツタノハ製貝輪より古く瀬戸内海形成以前の草創期後半～早期である。帝釈弘法滝洞窟遺跡からも出土しており（中越編1998）、高知県沖あたりまで入手に行ったと思われる。

Ⅰ：オオツタノハ製貝輪表面の凹点（列点）紋

喜念クバンシャ岩陰第2号墓出土品（晩期末～弥生前期前葉）の外面に装飾として凹点紋が施された事例がある（集文131・132）。嘉門A貝塚（弥生中期後半～古墳中期）の二個または三個一組の縦位凹点紋が施された事例（図7-71）に類似する（集文242）。また、マツノト遺跡（古墳後期）では、外面に点刻紋を施す事例がある（集文225）。古墳時代のスイジガイ・ゴホウラ製貝輪にも列点紋が施された事例がある（木下2000）。牛塚1号墳（岡山県総社市）出土のゴホウラ製広田下層型貝輪にも列点文があり、広田遺跡を介した貝交易でもたらされたと考えられている（西野2017）。なお、帝釈猿穴岩陰遺跡からは、列点紋ではないが周縁部に二列縦位で左2ヶ所、右3ヶ所穿孔されたサルボオ製貝輪（破片）が出土している（潮見ほか1976）。一方、土偶や石棒が少ない南西諸島であるが、後期中葉頃の奄美諸島と沖縄諸島では、土器文様を骨角器や砂岩に写した精神遺物が出土している。図6-104-2は、面縄第1貝塚（後期中葉）出土のゴホウラ製垂飾で奄美の嘉徳Ⅰ・Ⅱ式土器の文様意匠の一部を彫刻している（集文135）。図6-122-2は、平敷屋トウバル遺跡（後期中葉）から出土した砂岩製線刻石柱である。線刻は、沖縄の伊波式、荻堂式、大山式、奄美の嘉徳Ⅰ・Ⅱ式の文様意匠を带状に組

合せた構成である。砂浜に立てて祭祀に使用されたと考えられる（集文160）。時期、材質と規格は少し異なるが、同様にイルカ解体の浜に立てられた真脇遺跡の彫刻木柱（前期末～中期初頭）を彷彿とさせる（石川県立埋蔵文化財センター1986）。その文様は、シンメトリーな分割同心円紋の組合せで前期の漆塗容器の意匠と似る。

同時代の南海産貝製品を忠実に粘土で象る東日本縄文人と抽象な幾何学模様を嗜好する奄美・沖縄縄文人の精神世界（想像・創造・表現）の違いが現代の多様な地域習俗から見てもたいへん興味深い。

Ⅱ：貝輪素材埋納・集積遺構

現時点でオオツタノハ素材及び未成品の埋納・集積遺構は、集成した全ての時代で未検出である。このことは、オオツタノハ製貝輪を理解する時の重要な視点の一つとなる。ただ、素材貝の扱いは、東西日本で地域差が顕著である。東日本では、曾谷貝塚D地点のイタボガキ未製品93個埋納土坑1基（中期）の事例のみである（集文63）。一方、西日本は、沖縄諸島で南海産貝集積遺構が弥生以降多く見られるが、本稿では縄文時代に限る。全て晩期で熱田第二貝塚はゴホウラ1基（Ⅰa類）、宇地泊兼久原貝塚はオオソデガイ・アツソデガイ各1基、阿波連浦貝塚はゴホウラ1基（Ⅱa）、古座間味貝塚でゴホウラ1基（Ⅱa類、Ⅲ類）、大原貝塚A地区はゴホウラ1基Ⅰaが出土し、背腹利用面と加工の度合いから分類されている。性格は、貝交易のストック（備蓄）と考えられている（島袋1989）。今後の時期的・地域的事例の増加が待たれる。なお、古座間味貝塚、阿波連浦貝塚からは、オオツタノハが出土している（図6-127-1、表10）。

（2）彦崎貝塚へもたらされた搬入品

搬入品は、石材・石器、骨角貝製品・素材、食料、縄文土器等40種あり（表5）、画期（前期後半～末、中期前半、後期中葉～後葉、晩期中葉）が認められる。遺跡の立地上、丸木舟の利用は必然である。搬入品は、彦崎貝塚から大雑把な直線距離で①：20km以内（G）、②：30km以内（A・B）、③：50～60km以内（D・E・F・L・U）、④：100km以内（Q・R・T）、⑤：150km以内（H）、⑥：200km以内（J）、⑦：250km以内（C・I・U・V・W・X・c・i～m）、⑧：400km以内（N・O・d・g・h・n）、⑨：450km以内（H・K・Y・Z・e・f）、⑩：600km以内（P・a）、⑪：700km以内（b）、⑫：850km以内（P）、⑬：2,000km以内（S）である。実際は、天候や地形的な難所に遭遇して大小迂回する場合があったと考えられる。搬入品自体は、定期便（①～③・⑭）、不定期便（④～⑬）に分類できる。定期便でも特に（A）は、生業戦略上最優先された。渡島ルートは、植松、広江から水島灘へ抜け下津井まで廻り、そこから丸木舟で

表7 弥生～古墳時代東西別時期別出土遺跡総数一覧表

エリア	出土遺跡総数	弥生前期			弥生中期				弥生後期				古墳時代							7世紀			8世紀			9／10世紀	不明	
		前葉	中葉	後葉	前期	前葉	中葉	後葉	中期	前葉	中葉	後葉	後期	初頭	前期	4C末	中期中葉	中期	後期6C	6C後／7C初	前葉	中葉	後葉	前葉	中葉			後葉
東日本	23	－	－	－	－	3	1	3	－	5	－	－	－	1	－	1	－	－	5	1	1	1	1	－	－	－	－	
西日本	56	2	－	－	3	4	－	1	4	3	－	－	7	1	1	－	6	11	2	5	1	－	－	－	－	－	2	5

表8 弥生～古墳時代東西別時期別出土総点数一覧表

エリア	出土総点数	弥生前期				弥生中期				弥生後期				古墳時代							7世紀			8世紀			9～10世紀	不明
		前葉	中葉	後葉	前期	前葉	中葉	後葉	中期	前葉	中葉	後葉	後期	初頭	前期	4C末	中期中葉	中期	後期6C	6C後～7C初	前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉		
東日本	236	—	—	—	—	37	≤2	11	—	161	—	—	—	2	—	1	—	—	9	1	2	2	4	4	—	—	—	—
西日本	490	10	—	—	32	9	—	1	8	10	—	—	10	23	1	—	48	268	21	9	2	—	—	—	—	—	19	19

瀬戸大橋が架かる橋脚下の島伝いに坂出市金山の麓まで達したと考えられる。渡れば、徳島 (③)、愛媛 (⑦) のルートにも乗ることができる。(I) は、別府湾から佐田岬を通り、松山、今治の沿岸部を廻り、坂出に至って丸木舟による復路で彦崎貝塚にもたらされた。瀬戸内海と児島湾が成立した前期前葉以降に瀬戸内縄紋人は、舟を操り海産資源の利用を開始した。それに伴って操船・漁撈技術と漁撈具性能が向上するとともに対外的な交流も必然的に促進された (田嶋2015)。前期・中期の搬入品は、自らの渴望や入手した情報に基づき新しく開拓した東西南北の陸路・海路・内水面・河川ルートを丸木舟で連絡して主要分布域や原産地から彦崎貝塚へ持ち込まれた (持ち込んだ) ことを如実に示している。後晩期に限ると⑧ (O) は、渥美半島から伊勢湾を渡り、松阪へ廻り、名張、榛原から大和川・淀川を下り、大阪湾へで瀬戸内北岸航路で中部瀬戸内まで行き、高梁川河口の島伝いに彦崎貝塚へもたらされたと考えられる。⑨ (H) は、北陸から琵琶湖、淀川、瀬戸内海北岸航路もしくは若狭、山陰から県北へ抜け、吉井川を下ってもたらされたと考えられる。⑭ (S) は、台湾北西部以南が生息域の北限である。汽水域を好み春～初夏に産卵のため着岸する。黒潮にのり、紀伊水道から瀬戸内海に入り児島湾へ侵入した。ウシサワラとともに南海産魚類の指標種である。ウシサワラは、森ノ宮貝塚、五反島遺跡、鳥浜貝塚、本刈谷貝塚、余山貝塚等で出土している。共に巨大化する種であり、東名遺跡のトウカイハマギギは加工が見られる (大江他2015・2016, 大阪府立弥生文化博物館2021)。マダイやサワラとともに彦崎貝塚の風物詩であったと思われる。⑥ (J) は、隠岐の島 (島後) から舟で島根半島へ上陸し中海を渡り、米子から中国山地を越え高梁川 (支流を含む) 上流から下り、河口の島伝いにもたらされた。県内では、加曽利B1・2式 (関東)、大洞A・A'式 (東北)、夜臼IIa式 (北部九州) 土

器が児島湾北岸の津島岡大遺跡、加曽利B1式、夜臼IIb式、離山式 (中部) が百間川沢田遺跡、県北吉井川上流の久田原遺跡で加曽利B1式、九州産管玉、久田堀ノ内遺跡で加曽利B1・2式、御経塚式 (北陸)、安行3a式 (関東)、大洞BC・C1・2式 (東北)、ヒスイ製勾玉 (北陸)、県南内陸の南溝手遺跡から孔列紋土器 (韓半島)、窪木遺跡から夜臼I式土器、津寺遺跡からヒスイ大珠が出土している。足守川河口の吉野口遺跡からは腰岳産黒曜石と九州産管玉が出土している。徳島産の石棒も当該期に岡山へ入ってくる (田嶋2018)。東西南北各地 (近距離・遠距離) から少量でも物資が彦崎貝塚や岡山の地へ持ち込まれていることは、季節ごとの多様な輸送ルートと情報ネットワークの存在を裏付けている。

オオツタノハ供給地からの最長距離は、彦崎貝塚－八丈島間が約590km、彦崎貝塚－奄美大島間が約820kmである。学史で見たように東西の供給地遺跡からは、瀬戸内系土器等が出土している。現時点では、貝輪の分布が九州島東側、四国、中国地方日本海側でない (図6) ことと先に見たベンケイガイ製貝輪や土器等の遺物の搬入状況を勘案すると伊豆諸島から伊豆半島・東海西部渥美半島を経由して大阪湾 (大和川・淀川) から瀬戸内北岸航路で彦崎貝塚へもたらされたルートが現状では最有力視される。

(3) 弥生～古墳時代のオオツタノハ製貝輪予察

紙幅の都合で、現時点の集成データ概要にとどめる。

管見では、18都道府県 (便宜上、以下宮城県から福岡県を東日本、岡山県から沖縄県を西日本とする) の79遺跡 (東日本23遺跡、西日本56遺跡) から726点⁽¹⁴⁾ 以上 (東日本236点、西日本490点) が出土している (図7, 表6～8)。縄文時代に比べ東西日本で遺跡数が逆転したこと、北海道・北東北で出土せず分布域が縮小し、沿岸部だけでなく山間部、中国地方日本海側、九州東北部

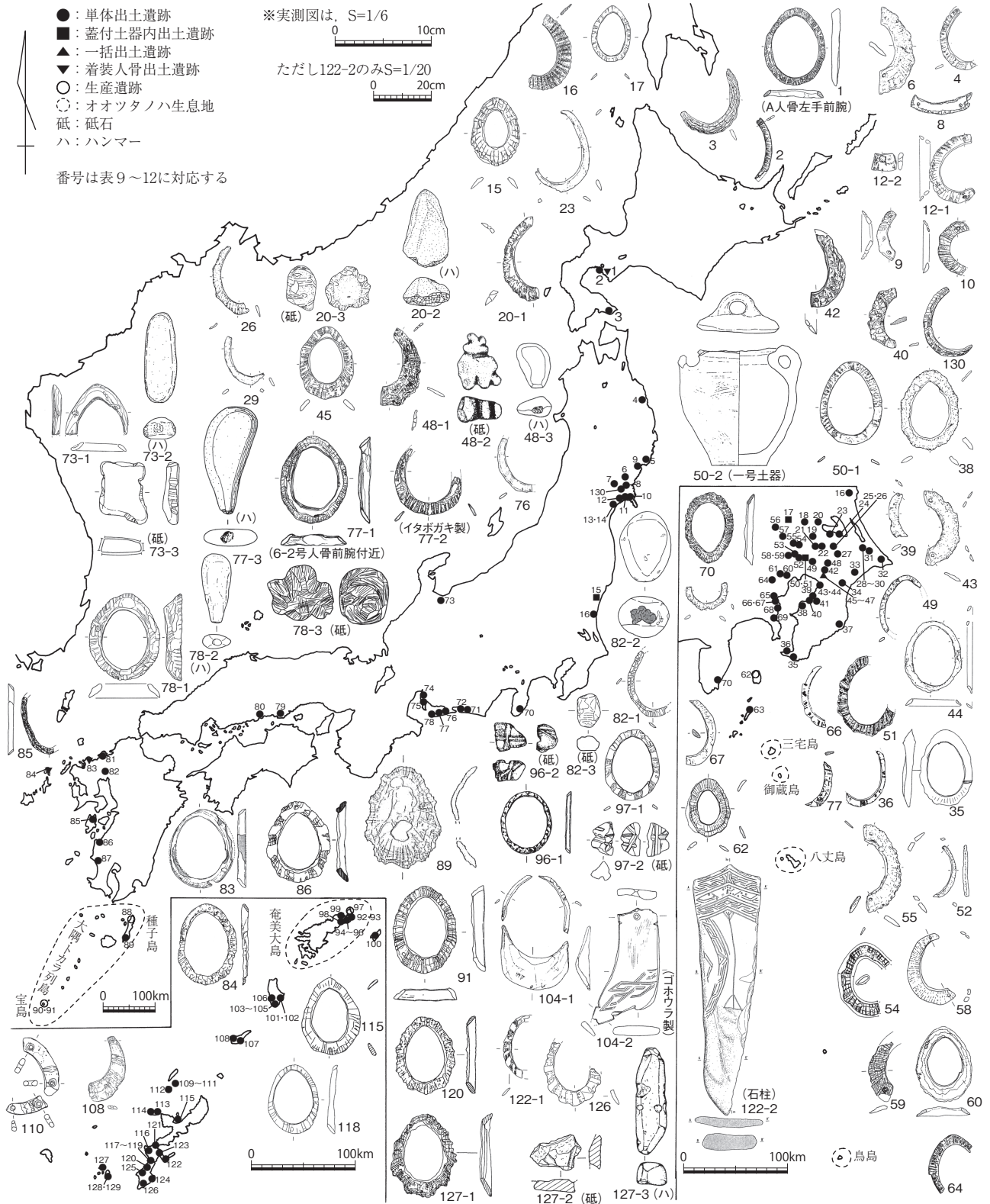


図6 縄文時代オオツタノハ製貝輪・製品出土遺跡及び実測図 (関連遺物含む)

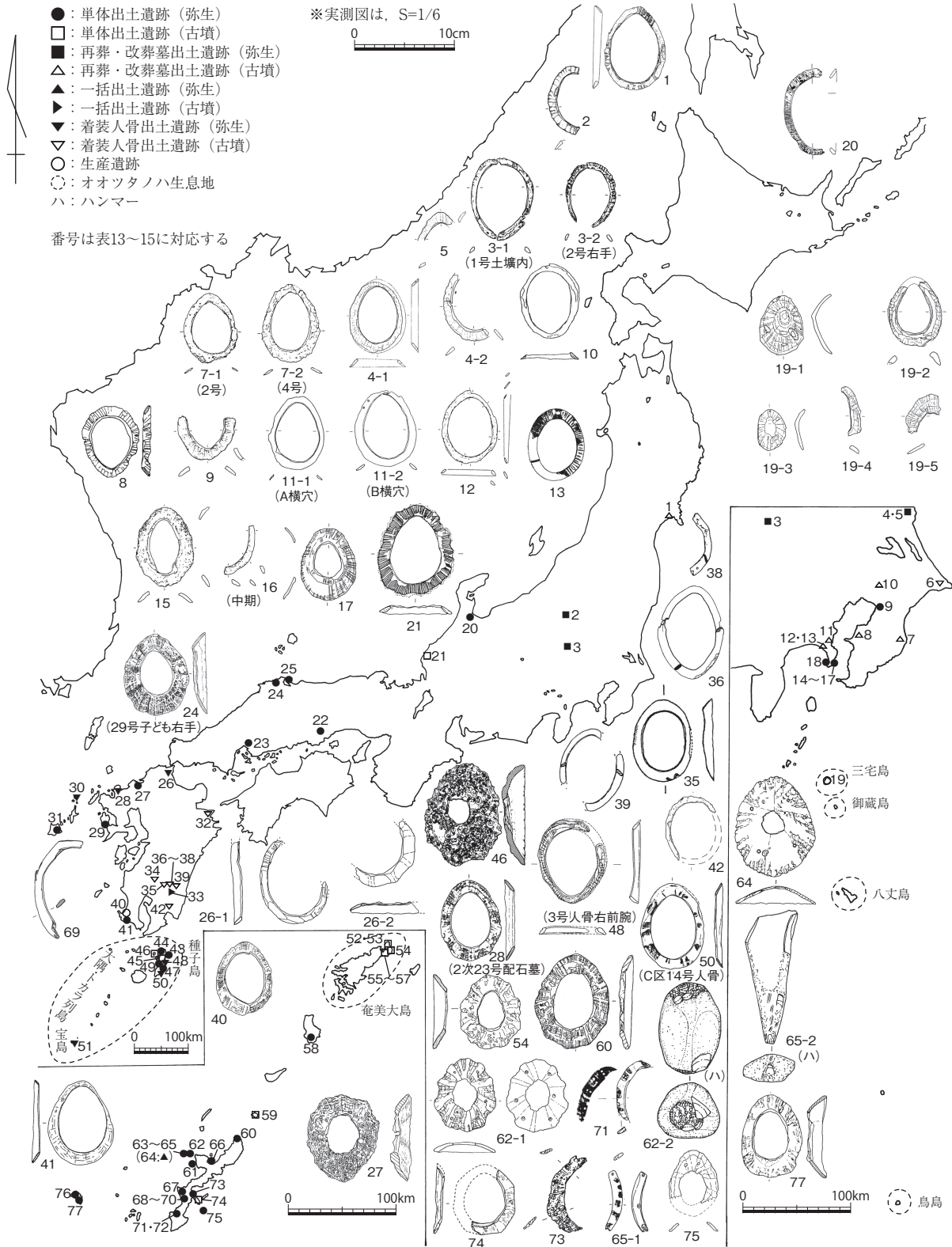


図7 弥生～古墳時代オオツタノハ製貝輪・製品出土遺跡及び実測図(関連遺物含む)

及び薩摩半島と宮崎県南部の内陸部（九州島東側）が新しく分布圏に加わったことが大きな変化点である。

東日本の遺跡数は、23遺跡（神奈川県9、千葉県6、群馬県・茨城県各2、宮城県・東京都・富山県・福井県各1）である。西日本は56遺跡（鹿児島県21、沖縄県18、宮崎県7、長崎県3、福岡県・島根県各2、大分県・広島県・岡山県各1）である。東日本の出土総点数は236点（東京都157点以上、群馬県36点、神奈川県15点、千葉県14点、茨城県10点、富山県2点以上、宮城県・福井県各1点）である。西日本は490点（鹿児島県296点、沖縄県97点、宮崎県42点、佐賀県23点、大分県12点、福岡県8点、長崎県・島根県各4点、広島県3点、岡山県1点）である。検出遺構は、東千草山遺跡の3類（弥生後期前葉）、姪浜遺跡（同中期初頭）の5類、伊礼原遺跡の6類（弥生後期～古墳）、平敷屋トウバル遺跡の3・5類（弥生後期後半～古墳後期）と8類を除くと2類と1類に二極化する（表13～15）。このことは、縄文時代と大きく異なる特徴である（表4）。特に西日本では、2類が大隅諸島～トカラ列島の遺跡に偏存する（図7、表13～15）。

時期別の動向は、東西日本で若干差が認められる。西日本が弥生前期初頭から利用が始まるのに対して、東日本は、弥生中期からである（表7・8）。西日本では、製作遺跡の高橋貝塚、発注者の松原遺跡、大友遺跡（2・3次）、蒲生30号石棺墓の事例が示すように前期前葉段階から琉球列島との間で貝交易が活発化していた。なお、松原・大友では着装事例が認められる。東日本では中期前葉に3遺跡（八束脛洞窟、岩津保洞窟、雨崎洞穴）、西日本では3遺跡（姪浜遺跡、南方遺跡、宇佐浜B貝塚）見られる。中でも岩津保洞窟5～7号再葬墓は大きな舞台装置を伴う精神世界の演出である（表13・集文171）。また、瀬戸内の中山貝塚と南方遺跡はゴホウラ製貝輪と2種セット関係が見られる（表14）。姪浜遺跡資料（図7-27）は、未製品で貝玉1点が共伴する（集文198）。同中葉は東日本で1遺跡（大境洞窟）見られる。大境洞窟は、相当量の未成品とマクラガイ垂飾が出土している（集文192）。なお、八束脛洞窟からマクラガイ貝玉、瀬戸内の津雲貝塚からマクラガイが出土している（集文106・260）。同後葉は、東日本3遺跡（ムジナⅢa遺跡、差洪遺跡、間口洞窟）、西日本1遺跡（アンチの上貝塚）である。ムジナⅢa遺跡と差洪遺跡は元は同一遺跡で、各々再葬墓（土器棺）からの出土で小児以下用と想定されている（図7-4-1・2、同7-5、集文172）。後期前葉は東日本で5遺跡（東千草山遺跡、大浦山洞穴、間口洞穴、毘沙門C洞窟、ココマ遺跡）、西日本で3遺跡（松ノ尾遺跡、嘉門B貝塚、北原貝塚）である。ココマ遺跡は、中期後葉から継続する供給地三宅島の製作遺跡である。第一次加工の残渣が

多量に出土している（図7-19-1～5・集文191）。中期から三浦半島洞窟集団の差配が推察される。松ノ尾遺跡は、ゴホウラ・イモガイ製貝輪と3種セットをなす（図7-41・集文213）。

古墳時代初頭は、東日本1遺跡（海外洞穴）、西日本1遺跡（鳥ノ峯遺跡）である。両者は弥生後期後半から継続する遺跡である。鳥ノ峯6b号成年女性は13個着装（左4、右9）に首飾りも具備する厚葬である（表14・集文220）。前期末は東日本1遺跡（龍ヶ岡古墳）で家形石棺からゴホウラ背面貝輪とイモガイ製横型貝輪とともに出土した⁽¹⁵⁾（図7-21・集文72・193、中司1997）。前期は、西日本1遺跡（用見崎遺跡）である。畿内及び周辺部で儀器である腕輪形石製品の使用がほぼ終焉を迎えた中期及び中期中葉は西日本貝交易の画期で17遺跡（築山古墳、牧ノ原箱式石棺、島内ST101、旭台9号、日守2号・5号・6号、飯隈20号、広田遺跡、ナガラ原西貝塚、大堂原貝塚、嘉門A貝塚、具志川グスク崖下埋葬址、清水貝塚、伊礼原D・E遺跡、伊礼原遺跡）でみられる。箱式石棺とこの地域に特徴的な地下式横穴墓からの出土が目立つ。築山古墳や広田遺跡をはじめ多量着装事例も多い。また、この時期の地域首長層は、南海産貝製貝輪等を選択的に発注し、入手している。広田遺跡は後期末から継続する遺跡である。C区14号成人女性人骨は、全時代を通して国内最多着装37点（左手16点、右手19点+ゴホウラ製2点）である（表14）。男女とも着装する。この時期に広田遺跡が国内の骨・貝製装身具全体に与えたインパクトは大きかった。後期は東日本5遺跡（赤塚古墳、鳥ヶ崎A・B横穴、住吉神社裏洞穴、佐島横穴）、西日本2遺跡（立切64号、平敷屋トウバル遺跡）である。三浦半島の洞窟遺跡が目立つ。立切64号は、小児人骨右腕2点・女性人骨左腕2点着装事例である（集文211）。6C末～7C初頭は、東日本1遺跡（五松山洞窟）、西日本は5遺跡（上能野貝塚、椎ノ木遺跡、用見崎遺跡、安良川遺跡、サウチ遺跡）でみられる。7C前葉は、東日本1遺跡（市宿4号）、西日本1遺跡（ナガラ原東貝塚）である。同中葉（東前2号）、同後葉（御山遺跡）、8C前葉（東前4号）は全て千葉県の事例である。御山遺跡の箱式石棺以外は、全て横穴墓出土である。この時期、九州の少数の装飾古墳には、南海産貝類（スイジガイ）をモチーフにした紋様意匠をもつものがある。西日本は概ね7世紀前葉にはオオツタノハ製貝輪の使用が終了していた可能性が高いと思われる。一方、東日本は8世紀前葉まで使用される。また、南海産クロフモドキやアンボンクロザメを素材にした韓半島に起源する貝装馬具の終焉もほぼリンクするようであり興味深い（橋本2013）。

環状品は、完成品が多いが破片や未製品、多孔品（貝札）も見られる。また、意図的に亀甲形に仕上げる事例

もある（図7-26-2, 74）。一方、コマ遺跡は、東の供給地の生産遺跡で第一次加工の残渣が大量に出土している（集文191）。ただ、西の供給地遺跡は未だ不明な点が多い。また、マツノト遺跡では貝輪表面に点刻紋、嘉門A貝塚では凹点紋列を施すものがある（集文225・242）。多穿孔の半環状品（具志川グスク崖下埋葬址例）やその他製品（垂飾）もみられるが少ない。しかも供給地の遺跡で見られることは縄文時代との違いである。また、製作石器類の事例も少ない。この点に関し、山崎真治は海岸のサンゴを利用したためと考える⁽¹⁶⁾。一方、沖縄諸島では、特徴的な南海産素材貝の集積遺構が展開する（島袋1989）。また、弥生時代のゴホウラ・イモガイ製品（貝輪・垂飾等）、タカラガイ製品（垂飾等）とのセット関係の東限は、岡山市南方遺跡のゴホウラ製貝輪との2種セットである。一方、古墳時代は、福井市龍ヶ岡古墳のゴホウラ・イモガイ製貝輪の3種セットである。南西諸島における地理的南下（サンゴ礁発達度）と素材多様化の連動現象は縄文時代と同様に生息環境を反映したものである。今回の集成を通して時期比定（絞り込み）の困難さを再確認した。成果をより深化させるためには、全時代のオオツタノハ製貝輪自体の年代測定も有効な手段の一つだろう。

（4）結語

オオツタノハ製貝輪素材（生貝）の捕獲作業は、命を落とす危険が伴う。そのため外洋航海技術に長け、東西供給地の陸海地理、黒潮、気象、生態系、生息域、規格、捕獲時期を熟知する限られた集落の人々が計画的に担った。その希少性故に縄文時代の人々は、地域性はあるものの不足を素材転換で補うほどそれに社会的価値（威信性）を見出した。ただ捕獲道具は現時点で未解明である。また、縄文時代と弥生～古墳時代のオオツタノハ製貝輪は、異なる生業が存立基盤の社会的産物のため嗜好・憧れ度、派生を含む素材ランク及びセット関係の地域的異同がある。

本論での検討の結果、彦崎貝塚のオオツタノハ製貝輪は子ども用で縄文後期後葉の盛行期に伊豆諸島から渥美半島・大阪湾経由、瀬戸内北岸航路でもたらされた。また、貝輪使用開始期（早期末）、盛行期（後晩期）、南海産貝製品とのセット関係は東西日本で同調的だが終焉時期に地域差が見られた。1点の貝輪は、分布圏外の消費地と生産地を巡る東西貝の道の地域研究と遠隔地間交易の実態解明に一石を投じた。今回、国内の209遺跡から1,391点以上を集成した。また、本文で述べた課題及び貝輪属性の統計処理、弥生時代以降の研究は継続して追求したい。なお、本論には2021年度（公財）福武教育文化活動助成の成果の一部を含む。

謝辞 次の皆様と機関には文献・写真提供・実見及び時期比定等のご教示でたいへんお世話になりました。末筆ですが厚くお礼申し上げます。（五十音順、敬称略）

青木 敬 赤塚弘美 石堂和博 扇崎 由 大西雅也 忍澤成規 小野寺智哉 加藤賢二 久野正博 黒住耐二 小林利晴 佐藤亮太 白石 純 新里貴之 新町正 鈴木康二 鈴木素行 須田英一 高取 仁 竹内直文 西野 望 西野雅人 林 竜馬 原田悠希 廣瀬直樹 松本直子 峰村 篤 山崎真治 岡山県古代吉備文化財センター 岡山市教育委員会 岡山大学考古学研究室 岡山大学付属図書館 岡山理科大学地理考古学研究室 銚子市教育委員会

注

（注1）講座5周年記念事業として2019年7月27日（土）、同定者である大江文雄先生をお招きし、講話後、我々彦崎貝塚保存会員と受講生に直接指導いただく機会を得た。

（注2）東京大学理学部人類学教室の発掘調査及びその報告では、明確な後期の人骨を除くとほぼ全て前期として扱われている（酒詰1951、池葉須1971、遠藤1979、山崎・高橋2007）が批判的な見解もある（間壁1987）。なお、小児・幼児骨も出土している（遠藤1979、集文104）。

（注3）2008年～2011年まで追加指定を目指した範囲確認調査を行った（田嶋2013）。また、2008年から2017年まで史跡用地の公有化事業を行い、現在も整備事業を継続している。なお、普及活用事業については、年度毎の岡山市埋蔵文化財センター年報を参照のこと。

（注4）これらの文献より前には、概説本（木村・鎌木1956、平田1956）、池葉須の自費出版による報告書（池葉須1971）や岡山県史に掲載された土器（高橋1987）、高橋による縄文土器の解説（高橋1981）等があったが、彦崎貝塚の全体像を具体的に知ることはできなかった。

（注5）（集文27）では、クマサルボオ製15点と魚類尾棘埋納土器と記載されている。ちなみに、江見はこの小型貝輪を漁撈具と推察している（集文38）。

（注6）第2号土器には、ベンケイガイ製1点、サルボオ製18点が入っていた。他に戦前の蓋付土器内出土貝輪として神戸市夢野で弥生土器（壺）からテングニシ製約40個が出土した事例（浜田1921）、一括遺物として立木貝塚（茨城県北相馬郡利根町）のベンケイガイ製が上下に十数個連なった事例が知られていた（集文48）。大浜遺跡（長崎県五島市）の弥生時代甕棺からも多量副葬（着装）貝輪が出土している（集文203）。なお、古作に続く事例は、1981年の冬木A貝塚が戦後唯一である（集文258）。また、神戸市夢野事例は、その後ゴホウラ製であることがわかった（岡崎・永井1977）。

（注7）伊川津貝塚からは、イタボガキに放射肋を表現したオオツタノハ模倣貝輪が1点出土している（集文101、図6-77-2）。

（注8）オオツタノハ出土の記載でも報告書で未確認の遺跡は、基本的に筆者の集成には加えていない。

（注9）最近、沖永良部島が嘗て供給地であった可能性が示された

(山崎・黒住・宮城2021)。

(注10) (田嶋2018) に (小野編2019) と (集文106) の出土点数を加算している。県内の最多着装は、津雲貝塚・清野第34号女性人骨15個 (サルボオ製完形: 左腕8, 右腕7) である (清野1920)。

(注11) サルボオまたはアカガイの同定ができない貝輪は便宜上アカガイ系として扱った。

(注12) 【縄文遺跡数】 東日本: 78,558, 西日本: 16,171 (水ノ江2017)。【全国縄文貝塚数上位】 千葉県657, 茨城県327, 宮城県218, 埼玉県170, 神奈川県131, 北海道109, 沖縄県109, 東京都90, 岩手県82, 愛知県82, 熊本県77, 青森県56, 岡山県53。【中四国貝塚数】 岡山県53, 広島県16, 徳島県14, 香川県11, 愛媛県・高知県・山口県各2, 鳥取県・島根県各1。【全国縄文遺跡数上位】 岩手県8,101, 北海道7,282, 長野県6,568, 千葉県5,973, 福島県4,719, 群馬県4,512。【中四国縄文遺跡数】 岡山県491, 愛媛県369, 島根県328, 広島県291, 高知県278, 鳥取県251, 山口県188, 徳島県124, 香川県54 (田嶋2019)。

(注13) 縄文時代の最多貝輪着装事例は、後期の榎坂貝塚 (福岡県遠賀郡岡垣町) 熟年女性人骨左腕29個着装である (岡垣町役場2011, 小田1971)。また、同じ遠賀川流域の河口部、山鹿貝塚 (同郡芦屋町) でも多量着装事例 (26個, 20個等) が見られる (山鹿貝塚調査団1972)。

(注14) 函石浜遺跡 (京都府京丹後市) 出土の完形貝輪 (橋本2006) がオオツタノハ製ならば総数が1点増える。古写真からだが、形態的に古浦遺跡事例とよく似ており、子ども用と推察される。

(注15) 弥生時代中期後半～古墳時代前期後半までに南海産貝類を祖型貝とした腕輪形儀器は、貝製→青銅製→石製 (碧玉等) へ素材転換する。従来、祖型貝は、ゴホウラ製=楕形石 (①), オオツタノハ製=車輪石 (②), イモガイ等製=石鈿 (③) に対応すると考えられてきたが、実際の規格性からオオツタノハは見直されている。また、①→②→③の順で分布圏が拡大し、その保有形態は、墳形、墳丘規模、セット数が強く関連している。大型前方後円墳で3種セット、同2種セット (①と②又は①と③) の事例は、畿内と周辺の特定古墳に限られる。3種の腕輪形石製品には相対的なランクがあり、最高位は楕形石 (=ゴホウラ) である (北條2013)。祖型貝についての見解は一致を見ないが、筆者は、北條の無理の少ない解釈に賛成である。古墳時代の本州島で唯一の南海産貝輪3種セットが認められる本古墳出土品は、重要な意義がある。

(注16) 筆者への私信による。

参考・引用文献

- 阿部芳郎2010「貝輪作りと実験考古学」『考古学の挑戦－地中に問いかける歴史学－』岩波ジュニア新書 岩波書店
- 阿部芳郎2014「貝輪の生産と流通」『縄文の資源利用と社会』季刊考古学別冊21 雄山閣
- 阿部芳郎2015「余山貝塚における骨角貝器の生産」『共同研究成果報告書9－高島多米治と下郷コレクションについて (余山貝塚編)－』大阪歴史博物館

阿部芳郎2019「身体装飾の発達と後晩期社会の複雑化」栗島義明編『身を飾る縄文人－副葬品から見た縄文社会－』先史文化研究の新展開2 雄山閣

阿部芳郎・金田奈々2013「子供の貝輪・大人の貝輪」『考古学集刊』第9号 明治大学文学部考古学研究室

飯島正明・中山清隆1989「箕面市瀬川遺跡出土の『の』字状石製品」『考古学ジャーナル』No.310 ニューサイエンス社

池葉須藤樹1971『岡山県児島郡灘崎町大字彦崎貝塚調査報告』(私家版)

石川県立埋蔵文化財センター1986『真脇遺跡』

遠藤美子・遠藤萬里1979『東京大学総合研究資料館収蔵日本縄文時代人骨型録』東京大学総合研究資料館

大江文雄・松井章・中村俊夫・田嶋正憲2015「岡山県の彦崎貝塚 (縄文前期) から発掘されたハマギキ科 *Plicofollis nella* (*Valenciennes*) とその出現意義」『日本古生物学会 第164回例会予稿集』日本古生物学会

大江文雄・田嶋正憲・真貝里香2016「岡山市彦崎貝塚の暖海性魚類とその古環境」『動物考古学』第33号－松井 章氏追悼号－日本動物考古学会

大阪府立弥生文化博物館2021『令和3年度企画展 繁栄の池上曾根遺跡－拠点集落としての姿－』大阪府立弥生文化博物館図録71

大竹憲治1990「いわゆる『の』字状石製品について」『史峰』第15号 新進考古学同人会

大竹憲治2011「玉璇璣再々考－三たび玉璇璣と『の』字状石製品の形態について－」『玉文化』8号 日本玉文化研究会

大野雲外1906「貝輪に就いて」『東京人類学会雑誌』第22巻第249号 東京人類学会

大野延太郎1925『古代日本遺物遺跡の研究』磯部甲陽堂

岡垣町役場2011「榎坂貝塚」『広報おかがき2011年12月25日号 (No.852)』

岡崎敬・永井昌文編1977『立岩遺跡』立岩遺跡調査会

岡本勇1992「貝輪あれこれ」『利根川』13 利根川同人

岡山市教育委員会2018『史跡彦崎貝塚新発見のオオツタノハ製腕輪』速報展リーフレット

沖縄県伊是名村教育委員会1979『具志川遺跡群－岩立地区埋葬遺構の調査－第三次発掘調査報告書』

沖縄考古学会2014『沖縄考古学会2014年度研究発表会資料集 先史時代の地域間交流を考える－貝交易以前のモノの移動と流通－』

沖縄考古学会2019『2019年度沖縄考古学会研究発表会 荻堂貝塚発掘調査100年 貝塚研究の新視点』

忍澤成視・戸谷敦司2001「縄文時代におけるオオツタノハガイ製貝輪研究の新視点－東京都八丈町八丈島・八丈小島および鹿児島県上屋久町口永良部島採集の現生オオツタノハの分析を中心として－」『動物考古学』第16号 動物考古学研究会

忍澤成視2001「縄文時代におけるオオツタノハガイ製貝輪の製作地と加工法－伊豆大島下高洞遺跡D地区検出資料からの検討－」『日本考古学』第12号 日本考古学協会

忍澤成視2004a「南海産の貝製品を模造した土製品」『考古学ジャー

- ナル』515号ニューサイエンス社
- 忍澤成視2004b「日本列島先史時代における東西『貝の道』の比較研究・その2」『高梨学術奨励基金 平成25年度研究成果概要報告』公益財団法人高梨学術奨励基金
- 忍澤成視2009「もう一つの『貝の道』－伊豆諸島におけるオオツタノハ製貝輪生産－」『動物考古学』第26号 動物考古学研究会
- 忍澤成視2010「伊豆諸島御蔵島・大隅諸島種子島における現生オオツタノハの調査－日本列島先史時代における東西『貝の道』の実態解明にむけて－」『動物考古学』第27号 動物考古学研究会
- 忍澤成視2019「オオツタノハ研究の最前線－生物学・考古学調査からみた貝輪素材獲得の実態－」『一般社団法人日本考古学協会第85回総会研究発表要旨』一般社団法人日本考古学協会
- 忍澤成視2020「広田遺跡のオオツタノハ製貝輪－種子島産貝輪素材の利用実態を考える－」『一般社団法人日本考古学協会第86回総会研究発表要旨』一般社団法人日本考古学協会
- 小田富士雄1971「榎坂遺跡」『日本考古学年報24（1971）』日本考古学協会
- 小野雅明編2019『磯の森貝塚・広江・浜遺跡2・新熊野遺跡』倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第17集 倉敷埋蔵文化財センター
- 片岡由美1983「貝輪」『縄文文化の研究』第9巻 雄山閣
- 金子浩昌1958「三宅島ココマノコシ遺跡で採取した動物遺存体」『伊豆諸島文化財総合調査報告（第1分冊）』東京都文化財調査報告書6 東京都教育委員会
- 金子浩昌1975「三宅島縄文弥生遺跡出土の動物遺存体」『三宅島の埋蔵文化財 伊豆諸島の考古学的研究その1－三宅・御蔵島編－』伊豆諸島考古学研究会編
- 金子浩昌1976「加曽利貝塚の骨・牙・貝製品」『加曽利南貝塚』中央公論美術出版
- 金子浩昌1984「伊豆諸島遺跡出土の自然遺物」『文化財の保護』第16号 東京都教育委員会
- 金子浩昌2009「古鬼怒川下流域縄文時代貝塚資料にみる貝輪の研究」『骨角器集成』東京国立博物館
- 金子浩昌・忍澤成視1986『骨角器の研究』縄文編Ⅰ・Ⅱ 考古民俗叢書22・23 慶友社
- 上條信彦編2016『一般社団法人日本考古学協会2016年度弘前大会 第一分科会津軽海峡圏の縄文文化研究報告資料集』日本考古学協会2016年度弘前大会実行委員会
- 川添和暁2019「東海地方の貝塚に残された副葬品」栗島義明編『身を飾る縄文人－副葬品から見た縄文社会－』先史文化研究の新展開2 雄山閣
- 関西縄文文化研究会2006『第7回関西縄文文化研究集会 関西縄文人の生業と環境発表要旨・資料集』
- 関西縄文文化研究会2015『第16回関西縄文文化研究集会 縄文研究と美術・縄文時代の装身具 発表要旨・資料集』
- 木下尚子編2013『ナガラ原東貝塚の研究－5世紀から7世紀前半の沖縄伊江島－』熊本大学文学部
- 木下尚子2000「八丁鎧塚1号墳スズガイ・ゴホウラ釧について」『長野県史跡 八丁鎧塚』須坂市教育委員会
- 木下尚子2003「農民的装身具の成立－弥生時代開始期における北部九州装身具の動向－」『先史学・考古学論究Ⅳ 考古学研究室創設30周年記念論文集』龍田考古会
- 木下尚子2005a「古浦遺跡の貝輪」『古浦遺跡』鹿島町教育委員会
- 木下尚子2005b「弥生時代の子供用貝輪論－古浦遺跡の貝輪によせて－」『古浦遺跡』鹿島町教育委員会
- 木下尚子2019「オオツタノハ製腕輪の再登場－弥生時代終末期の新しい祭祀－」『考古学研究室創設45周年記念論文集 先史学・考古学論究』Ⅶ 龍田考古会
- 木下尚子2020「種子島広田遺跡の研究－琉球列島における広田人の形質・技術的特徴、移動－」『一般社団法人日本考古学協会第86回総会研究発表要旨』一般社団法人日本考古学協会
- 木村幹夫・鎌木義昌1956「各地域の縄文式土器－中国－」『日本考古学講座』3 縄文文化 河出書房
- 九州縄文研究会2005『第15回九州縄文研究会沖縄大会 九州の縄文時代装身具 発表要旨・資料集』
- 九州縄文研究会2012『第22回九州縄文研究会鹿児島大会縄文時代における九州の精神文化発表要旨・資料集』
- 九州縄文研究会2020『第30回九州縄文研究会鹿児島（徳之島）大会 島々の考古学－人はなぜ島を目指すのか－ 発表要旨・資料集』
- 清野謙次1920『備中津雲貝塚発掘報告』京都帝国大学文学部考古学研究報告第5冊
- 清野謙次1946『日本民族生成論』日本評論社
- 栗島義明・別所鮎実2019『シンポジウム 海峡をつなぐ資源と道具』予稿集 明治大学黒曜石研究センター
- 栗島義明編2019『身を飾る縄文人－副葬品から見た縄文社会－』先史文化研究の新展開2 雄山閣
- 黒住耐二・樋泉岳二・赤嶺信哉・盛口 満2012「沖縄諸島の先史遺跡で初めて確認されたオオツタノハの生息（第15回動物考古学研究会開催報告）」『動物考古学』第29号 動物考古学研究会
- 黒住耐二1994「オオツタノハの供給地」『南島考古』第14号 沖縄考古学会
- 黒住耐二2018「彦崎貝塚から得られた微小貝類遺体（予報）」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第10号 岡山市教育委員会
- 国分直一・盛園尚孝1958「種子島南種子町広田の埋葬遺跡調査概報」『考古学雑誌』第43巻3号 日本考古学会
- 財団法人市原市文化財センター2000『市原市北野原遺跡』
- 財団法人とちぎ生涯学習文化財団2001『藤岡神社遺跡』栃木県教育委員会
- 酒詰伸男1951「岡山県児島郡彦崎貝塚」『日本考古学年報1（昭和23年度）』日本考古学協会
- 相美伊久雄2014「琉球列島の九州縄文中期土器について」『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』六一書房
- 作山智彦2000「奥東京湾沿岸の貝輪－貝輪の様相から見る交換の一端－」『松戸市立博物館紀要』第7号 松戸市立博物館
- 佐々木猛智・草薙 正・有馬康文・奥谷喬司1994「ツタノハガイとオオツタノハの関係」『ちりぼたん』第25巻2号 日本貝類学会
- 笹生一雄・渡部忠重1976「鳥島のオオツタノハガイ」『ちりぼたん』

第9巻8号 日本貝類学会

佐藤一夫2005「北海道における南貝産貝類について」『地域と文化の考古学Ⅰ』明治大学文学部考古学研究室

さわるきよし1885「びっちうにつかおほし」『じんるいがくのとも・じんるいがくわい よりあひのかきとめ 七 つぼめし ようごらう あむ』（東京人類学会1940に所収）

潮見浩・川越哲志1976「帝釈猿穴岩陰遺跡の調査」『帝釈峽遺跡群』亜紀書房

島袋春美1989「南島からみた貝の交易－弥生時代を中心に－」『考古学ジャーナル』311号 ニューサイエンス社

新里貴之2005「南西諸島の墓制（Ⅰ）－大隅諸島－」『地域政策科学研究』第2号 鹿児島大学大学院社会科学研究科

末永雅雄・小林行雄編1935『本山考古室要録』（私家版）

杉山浩平2014『弥生文化と海人』六一書房

杉山浩平編2019『神奈川県三浦市白石洞穴の発掘調査2014～2019』高城大輔2003「オオツノハ形土製腕輪について」『沼南町史研究』第7号沼南町教育委員会

高橋 護1981「近畿・中国・四国」『縄文土器大成』2 中期 講談社

高橋 護1987「彦崎貝塚」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県田嶋正憲2006『彦崎貝塚－範囲確認調査報告書－』岡山市教育委員会

田嶋正憲2007『彦崎貝塚2－範囲確認調査報告書－』岡山市教育委員会

田嶋正憲2008『彦崎貝塚3－範囲確認調査報告書（縄文晩期）－』岡山市教育委員会

田嶋正憲2013『彦崎貝塚4－史跡指定地周辺範囲確認調査報告書－』岡山市教育委員会

田嶋正憲2015「先史漁撈関連資料の基礎的考察－岡山県下出土事例の再検討－」『半田山地理考古』第3号 岡山理科大学地理考古学研究会

田嶋正憲2017「大悲観岩陰遺跡採集の縄文時代遺物（Ⅰ）」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第9号 岡山市教育委員会

田嶋正憲2018「岡山県の縄文時代装身具に関する基礎的考察」『半田山地理考古』第6号 岡山理科大学地理考古学研究会

伊達大会実行委員会2014『貝塚研究の新視点 墓とモニュメント 日本考古学協会2014年度伊達大会研究発表資料集』

北谷町教育委員会2010『伊礼原E遺跡』北谷町文化財調査報告書31

中四国縄文研究会2011『第22回中四国縄文研究会岡山大会 中四国地方縄文時代の世界文化』

中四国縄文研究会2015『第26回中四国縄文研究会高知大会 中四国の縄文貝塚』発表要旨・貝塚集成

東京人類学会1940『じんるいがくのとも じんるいがくわい よりあひのかきとめ 第1-7 つばいしょうごらう あむ』人類学叢刊 甲 人類学第一冊

東京帝国大学1930『日本石器時代人民遺物発見地名表（第五版補遺一）』岡書院

東京都八丈町教育委員会1987『東京都八丈町 倉輪遺跡』

東京都八丈町教育委員会1994『倉輪遺跡1994』

長井数明2004『穴神洞・中津川洞発掘記録抄』城川町教育委員会
中越利夫編1998「帝釈弘法滝洞窟遺跡の調査」『広島大学文学部帝釈峽遺跡群発掘調査室年報』XII

中司照世1997「古墳時代の社会」『福井市史（通史編）古代－中世』福井市

中野知照編1981『布勢遺跡発掘調査報告書』（財）鳥取県教育文化財団

中村友昭2020「古墳時代における琉球列島産貝類利用の諸相」『木下尚子先生退任記念 先史学・考古学論究Ⅷ』龍田考古会

永山卯三郎1930『岡山県通史』上編 岡山県

西野 望2017「岡山県総社市久代牛塚1号墳出土の貝釧について」『牛塚古墳群－スズキ株式会社岡山統合納整センター建設に伴う発掘調査（Ⅰ）－』総社市埋蔵文化財発掘調査報告26 総社市教育委員会

日本考古学協会2008年度愛知大会実行委員会2008「シンポジウムⅠ 縄文時代晩期の貝塚と社会－東海からの展望－」『日本考古学協会2008年度愛知大会研究発表資料集』

橋口尚武1988『島の考古学』UP考古学選書 東京大学出版会

橋口尚武1994「東の貝の道－伊豆諸島から東日本へ－」『日本考古学協会第60回総会研究発表要旨』日本考古学協会

橋口尚武2001『黒潮の考古学』ものが語る歴史シリーズ5 同成社

橋口尚武編1999『海を渡った縄文人－縄文時代の交流と交易－』小学館

橋本勝行2006『平成18年度丹後古代の里資料館春期企画展 函石浜遺跡とその発見者たち』京丹後市立丹後古代の里資料館

橋本達也2010「古墳時代交流の豊後水道・日向灘ルート」『弥生・古墳文化における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究』高知大学人文学社会科学系

橋本達也2018「古墳と南島社会古墳時代における南の境界域の実相・広域交流・民族形成」『国立歴史民俗博物館研究報告』第211集 一般社団法人 歴史民俗博物館振興会

橋本美佳2013「3有機質素材製品の型式学的研究②貝製品」『古墳時代の考古学4副葬品の型式と編年』同成社

浜田耕作1921「貝輪を容れた素焼壺」『人類学雑誌』第36巻8-12号 東京人類学会

樋口清之1952「腕飾考－石器時代身体装飾品之研究其六－」『上代文化』第23輯 国学院大学考古学会

平田英文1956『灘崎町史』灘崎町

北條芳隆2013「2玉と石製品の型式学的研究②腕輪形石製品」『古墳時代の考古学4副葬品の型式と編年』同成社

堀越正行1985「関東地方における貝輪生産とその意義」『古代』第80号 早稲田大学出版会

間壁葎子1987「考古学から見た女性の仕事と文化」森浩一編『日本の古代12 女性の力』中央公論社

松井 章・大江文雄・田嶋正憲2011「縄文貝塚出土のトゥカイハマギギ*Plicofollis nella* (Valenciennes) とその意義」『日本文化財科学会第28回大会研究会発表要旨集』日本文化財科学会

三島 格1975『貝をめぐる考古学－南島考古学の一視点－』学生社

水ノ江和同2017「史跡彦崎貝塚の過去・現在・未来」『彦崎貝塚史跡指定10周年記念特別講演会資料』岡山市教育委員会
 八木柴三郎・林 若吉1896「下總香取郡白井及貝塚村貝塚探究報告」『東京人類学会雑誌』第12巻127号 東京人類学会
 安川英二1988「貝製品」『伊川津遺跡』渥美町埋蔵文化財発掘調査報告書4 渥美町教育委員会
 八幡一郎1938「先史時代の交易」『人類学・先史学講座』第2巻 雄山閣
 山鹿貝塚調査団1972『山鹿貝塚－福岡県遠賀郡芦屋町山鹿貝塚の調査－』
 山崎真治・高橋 健2007『彦崎貝塚の考古学的研究』東京大学総合研究博物館研究報告第43号 東京大学総合研究博物館
 山崎真治・黒住耐二・宮城幸也2021「知名町中甫洞穴出土海産貝類の放射性炭素年代」『奄美考古学』第9号 奄美考古学会
 山野ケン陽次郎2010「先史琉球列島における貝製腕輪の研究」『東南アジア考古学会研究報告 第8号』東南アジアの生活と文化Ⅲ：飾る・祈る・標す－南海の装身具－ 東南アジア考古学会

オオツタノハ出土遺跡集成一覧表（表9～15）の引用文献（略号：集文）

- (1) 伊達市教育委員会2003『図録 有珠モシリ遺跡』
- (2) 北海道虻田町教育委員会1994『入江貝塚の遺物』虻田町文化財調査報告 第4集
- (3) 北海道亀田郡戸井町教育委員会1993『戸井貝塚3－縄文時代後期初頭の貝塚の発掘調査報告－』
- (4a) 大場磐雄1932「官幣大社安房神社境内発見古代洞窟遺跡調査報告（1）」『神社協会雑誌』第31巻第8号 神社協会
- (4b) 大場磐雄1932「官幣大社安房神社境内発見古代洞窟遺跡調査報告（2）」『神社協会雑誌』第31巻第9号 神社協会
- (5) 久慈市教育委員会1993『二子貝塚』久慈市埋蔵文化財調査報告書第16集
- (6) 戸谷教司2002「オオツタノハ考」岡本東三編『原始古代の安房国の特質と海上交通』千葉大学文学部考古学研究室
- (7) 岩手県大船渡土木事務所・陸前高田市教育委員会1992『門前貝塚－県道広田半島線改修に伴う緊急発掘－』陸前高田市文化財調査報告 第16集
- (8) 忍澤成視2011『貝の考古学』ものが語る歴史22 同成社
- (9) 花泉町教育委員会1971『貝島貝塚 第3次・第4次調査報告』
- (10) 栗原市役所2014『広報くりはら』平成26年2月1日号
- (11) 石越町教育委員会2003『富崎貝塚－北上川中流域淡水産貝塚の研究－』石越町文化財調査報告書 第1集
- (12) 宮城県教育委員会1986『田柄貝塚Ⅲ』骨角牙貝製品・自然遺物編 宮城県文化財調査報告書 第111集
- (13) 後藤勝彦2008「宮城県石巻市南境貝塚出土の骨角・牙・貝製品について」『秋田考古学』第52号 秋田考古学会
- (14) 東北大学文学部日本文化研究所1963『沼津貝塚石器時代遺物Ⅱ』考古資料第二集
- (15) 東京国立博物館2009『東京国立博物館所蔵 骨角器集成』
- (16) 東北歴史資料館1985『里浜貝塚Ⅳ』東北歴史資料館資料集13
- (17) 七ヶ浜町教育委員会1991『左道遺跡』七ヶ浜町文化財調査報告書第7集

- (18) 七ヶ浜町教育委員会1991『水浜遺跡』七ヶ浜町文化財調査報告書第8集
- (19) 鈴木裕芳1979「南高野貝塚」『茨城県史料』考古資料編 先土器・縄文時代 茨城県
- (20) 今橋浩一1980「オオツタノハ製貝輪の特殊性について」『古代探訪叢－滝口 宏先生古希記念考古学論集－』早稲田大学出版部
- (21) 藤本彌城1980『那珂川下流域の石器時代研究』Ⅱ
- (22) 山本愛三・草刈 正・金子浩昌1995「オオツタノハガイと考古学－オオツタノハガイの分類学的研究に関する考古学的遺物の系統的研究－」『九州の貝』第43号 九州貝類談話会
- (23) 栗島義明2020「オオツタノハ製貝輪を巡る諸問題」『考古学集刊』第16号 明治大学文学部考古学研究室
- (24) 渡辺 明・鈴木正博・西本豊弘・波方早季子2010「金土貝塚の再吟味－古鬼怒湾最奥部における貝塚文化と骨角器・貝製品の事例－」『動物考古学』第27号 動物考古学研究会
- (25) 今西 龍1906「神生貝塚記事（第二回）」『東京人類学会雑誌』第21巻第240号 東京人類学会
- (26) 樋口清之1940「日本先史時代人の身体装飾（下）」『人類学先史学講座』第14巻 雄山閣
- (27) 酒詰伸男1961『日本縄文石器時代食料総説』土曜会
- (28) 財団法人茨城県教育財団2013『上境旭台貝塚3』茨城県教育財団文化財調査報告第368集
- (29) 財団法人茨城県教育財団2015『上境旭台貝塚4』茨城県教育財団文化財調査報告第397集
- (30) 鈴木正博・鈴木加津子1981『取手と先史文化－中妻貝塚の研究－（下）』取手市教育委員会
- (31) 取手市教育委員会1995『中妻貝塚発掘調査報告書』
- (32) 西村正衛1984『石器時代における利根川下流域の研究－貝塚を中心に－』早稲田大学出版
- (33) 上高津ふるとと歴史の広場2000『第5回特別展図録 内海の貝塚－縄文人と海とのかかわり－』
- (34) 渡辺修一・石橋宏克1998「成田市荒海川表遺跡とその周辺」『千葉県史研究』第6号 千葉県
- (35) 千葉県立大利根博物館1992『特別展 川と古文化 展示図録』
- (36) 千葉県文化財センター1992『小見川町白井大宮台貝塚範囲確認調査報告書』千葉県文化財センター調査報告第220集
- (37) 大山 柏・杉山寿栄男・宮坂光次・甲野 勇1929「千葉県良文村貝塚調査概報」『史前学雑誌』第1巻第5号 史前学会
- (38) 江見水蔭1909「余山貝塚の大発掘」『探検実記 地中の秘密』博文館
- (39) 京都大学文学部1960『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第1部 日本先史時代
- (40) 大阪歴史博物館2015『共同研究成果報告書』9－高島多米治と下郷コレクションについて（余山貝塚編）－
- (41) 西山太郎2000「牛熊貝塚」『千葉県の歴史』資料編考古1（旧石器・縄文時代） 千葉県
- (42) 麻生正信ほか2017『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書32－東金市養安寺遺跡・大網白里市養安寺遺跡－』千葉

- 県教育振興財団調査報告書第758集 公益財団法人千葉県教育振興財団
- (43a) 大場磐雄1933「官幣大社安房神社境内発見古代洞窟遺跡調査報告(3)『神社協会雑誌』第32巻第1号 神社協会
- (43b) 大場磐雄1933「官幣大社安房神社境内発見古代洞窟遺跡調査報告(4)『神社協会雑誌』第32巻第4号 神社協会
- (44) 千葉大学文学部考古学研究室2009『千葉県館山市千葉県指定史跡安房神社洞窟第1次調査概報』
- (45) 千葉大学文学部考古学研究室2010『千葉県館山市千葉県指定史跡安房神社洞窟第2次調査概報』
- (46) 松嶋沙奈2013「千葉県館山市安房神社洞窟出土縄文土器覚書」『型式論の実証的研究Ⅰ－地域編年研究の広域展開を目指して－』千葉大学大学院人文社会学科
- (47) 金子浩昌・和田 哲1958『館山鉾切洞窟の考古学的研究』早稲田大学考古学研究室報告6 早稲田大学出版部
- (48) 酒詰仲男1941「貝輪」『人類学会雑誌』第56巻第5号 日本人類学会
- (49) 袖ヶ浦市教育委員会2016『山野貝塚総括報告書』
- (50) 市原市教育委員会1999『祇園原貝塚(本文編2)』上総国分寺台遺跡調査報告V
- (51) 市原市教育委員会2007『市原市西広貝塚Ⅲ(本文編2)』『市原市埋蔵文化財センター調査報告書』第2集(上総国分寺台遺跡調査報告XⅦ)
- (52) 財団法人千葉県文化財センター1998『市原市武士遺跡2』千葉県文化財センター調査報告第322集
- (53) 阿部芳郎2007「内陸地域における貝輪生産とその意味－貝輪づくりと縄文後期の地域社会－」『考古学集刊』第3号 明治大学文学部考古学研究室
- (54) 財団法人千葉県文化財センター1998『千葉市南部ニュータウンⅢ－千葉市有吉北貝塚1(旧石器・縄文時代)－』千葉県文化財センター調査報告第324集
- (55) 杉原荘介編1976『加曾利南貝塚』中央公論美術出版
- (56) 杉原荘介編1977『加曾利北貝塚』中央公論美術出版
- (57) 大山史前学研究所1937「千葉県千葉郡都村加曾利貝塚調査報告」『史前学雑誌』第9巻1号
- (58) 林田利之2000「千葉県佐倉市吉見台遺跡A地点」『(財)印旛郡市文化財センター発掘調査報告書』第159集 (財)印旛郡市文化財センター
- (59) 西川博孝ほか1971『中野木新山遺跡』中野木新山遺跡調査団
- (60) 八幡一郎1928「最近発見された貝輪入蓋付土器－下総古作貝塚遺物雑感のー」『人類学雑誌』第43巻第8号 日本人類学会
- (61) 堀越正行・田多井用章1996「東京大学所蔵の船橋市古作貝塚出土遺物」『千葉県史研究』第4号 千葉県
- (62) ジェラード・グロート他1951『姥山貝塚』ニッポニカ第1類 日本考古学第二巻 日本考古学研究所
- (63) 市川市教育委員会1978『曾谷貝塚D地点発掘調査概報』
- (64) 堀越正行2000「オオツタノハ製貝輪研究の現状と課題」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』頌寿記念会
- (65) 峰村 篤他1997『根木内遺跡第4地点発掘調査報告書』松戸市文化財調査報告書 第27集 松戸市教育委員会
- (66) 小栗信一郎1985「上新宿貝塚採集のオツタノハ製貝輪について」『流山市史研究』第3号 流山市教育委員会
- (67) 上川名 昭1993「千葉県流山市上新宿貝塚」『古代学論攷』創刊号 生田古代学会
- (68) 岡田光弘2000「上新宿遺跡」『千葉県の歴史』資料編考古1(旧石器・縄文時代) 千葉県
- (69) 甲野 勇1968『埼玉県柏崎村真福寺貝塚報告』小宮山書店(復刻版)
- (70) 阿部芳郎他1998「北区西ヶ原貝塚」『都内重要遺跡等調査報告書』都内重要遺跡等調査団
- (71) 山谷文人2001「西ヶ原貝塚出土の貝製品とその問題点について」『文化財研究紀要』第14集 東京都北区教育委員会
- (72) 木下尚子1996『南島貝文化の研究－貝の道の考古学－』法政大学出版会
- (73) 秋山道生1997「区史研究レポート1 昭和初期の志村地区における考古学調査と小豆沢貝塚採集寄贈資料」『いたばし区史研究』第6号 板橋区
- (74) 品川区遺跡調査会1994『大森貝塚 平成5年度範囲確認発掘調査概報』品川区埋蔵文化財調査報告書 第16集
- (75) 東京都大島町教育委員会1987『大島町野増遺跡 下高洞遺跡D地区 和泉浜C地点遺跡』
- (76) 東京都大島町教育委員会1996『東京都大島町下高洞遺跡D地区発掘調査報告書』
- (77) 東京都大島町1998『東京都大島町史』考古編
- (78) 金子浩昌・谷口 榮1998「渡浮根遺跡」『新島村史』資料編Ⅰ 史料 新島村
- (79) 武蔵野美術大学考古学研究会1972『宮の原貝塚』
- (80) 大場磐雄1977「安房神社境内発見古代洞窟遺跡調査報告」『大場磐雄著作集』第3巻 原始文化論考 雄山閣
- (81) 吉田 格1960『横浜市称名寺貝塚発掘調査報告』東京都武蔵野郷土館調査報告書1
- (82) 佐野大和1943「横浜市青ヶ台の石器時代遺跡」『古代文化』第14巻7号 日本古代文化学会
- (83) 横浜市教育委員会1994『横浜市金沢区青ヶ台貝塚発掘調査概要』
- (84) 横須賀市2000「夏島貝塚」『新編横須賀市史』別編考古
- (85) 神沢勇一1962「吉井城山第1貝塚出土の骨角牙器・貝製品(1)」『横須賀市博物館研究報告(人文科学)』第6号 横須賀市博物館
- (86) 横須賀市教育委員会1999『吉井城山』横須賀市文化財調査報告書 第34集
- (87) 下田市教育委員会1988『図説 下田市史』
- (88) 下田市2010「考古6 火達山遺跡」『下田市史』資料編1 考古・古代・中世
- (89) 磐田市教育委員会1960『西貝塚』
- (90) 浜松市教育委員会1960『蜆塚遺跡－その第三次発掘調査－』
- (91) 公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2014『小竹貝塚発掘調査報告書－北陸新幹線建設に伴う埋蔵文化財調査報告X－(第1分冊)』富山県文化振興財団埋蔵文化財調査報告第60集

- (92) 八幡公民館郷土史編纂部1958『西屋敷貝塚』八幡町史資料第4号
- (93) 渡辺 誠2002「75. 西屋敷貝塚」『愛知県史』資料編1 考古1 旧石器・縄文 愛知県
- (94) 紅村 弘1963『東海の先史遺跡 総括編』
- (95) 渡辺 誠2002「78. 東畑貝塚」『愛知県史』資料編1 考古1 旧石器・縄文 愛知県
- (96) 文化財保護委員会1952『吉胡貝塚』埋蔵文化財発掘調査報告第1
- (97) 清野謙次1969『日本貝塚の研究』岩波書店
- (98) 愛知県田原市教育委員会2007『国指定史跡吉胡貝塚（1）』田原市埋蔵文化財調査報告書 第1集
- (99) 大塚達朗編2011『保美貝塚の研究』南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター研究報告第3冊 南山大学人類学博物館
- (100) 田原市教育委員会2017『保美貝塚－渥美半島における縄文時代晩期の大貝塚－』田原市埋蔵文化財調査報告書 第11集
- (101) 渥美町教育委員会1988『伊川津遺跡』渥美町埋蔵文化財調査報告4
- (102) 渥美町教育委員会1995『伊川津遺跡（1992年度）』渥美町埋蔵文化財調査報告7
- (103) 田原市教育委員会2015『伊川津貝塚・平野貝塚調査概要報告書』田原市埋蔵文化財発掘調査報告書 第11集
- (104) 田嶋正憲編2006『彦崎貝塚－範囲確認調査報告書－』岡山市教育委員会
- (105) 本書
- (106) 笠岡市教育委員会2020『津雲貝塚総合調査報告書』笠岡市埋蔵文化財発掘調査報告6
- (107) 宮本一夫編2000『福岡県岐志元村遺跡－縄文貝塚・江戸墓地の発掘調査－』考古学資料集15 九州大学大学院人文科学研究所考古学研究室
- (108) 佐賀市教育委員会2009『東名遺跡群Ⅱ（第4分冊）－東名遺跡2次・久富二本杉遺跡－』佐賀市文化財調査報告書第40集
- (109) 佐賀市教育委員会2016『東名遺跡Ⅳ（第2分冊）－東名遺跡総括報告書－』佐賀市文化財調査報告書第100集
- (110) 宮本一夫編2001『佐賀市大友遺跡－弥生墓地の発掘調査－』考古学資料集16 九州大学大学院人文科学研究所考古学研究室
- (111) 宮本一夫編2001『佐賀市大友遺跡Ⅱ－弥生墓地の発掘調査－』考古学資料集30 九州大学大学院人文科学研究所考古学研究
- (112) 川道 寛編1997『宇久松原遺跡』宇久町文化財調査報告書第4集 長崎県宇久町教育委員会
- (113) 五和町教育委員会2000『一尾貝塚－熊本県天草郡五和町大字御領字浜田所在縄文貝塚の調査－』五和町史料編（その11）
- (114) 岩崎新輔2005「荘貝塚出土貝輪に関する報告」『鹿児島考古』第39号 鹿児島県考古学会
- (115) 本多道輝1994「九州本土と南東の交流」『第12回特別展図録九州の貝塚－貝塚が語る縄文人の生活－』北九州市立考古博物館
- (116) 南種子町教育委員会2011『一陣長崎鼻遺跡』南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書17
- (117) 南種子町教育委員会2016『広田川遺跡 横峰B・F遺跡－陣長崎鼻遺跡』南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書18
- (118) 十島村教育委員会1994『トカラ列島の考古学的調査』十島村埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
- (119) 宝島大池遺跡発掘調査班1995「吐噶喇列島 大池遺跡」『国立歴史民俗博物館研究報告』第60集 国立歴史民俗博物館
- (120) 宝島大池遺跡発掘調査班1997「トカラ列島宝島大池遺跡」『国立歴史民俗博物館研究報告』第70集 国立歴史民俗博物館
- (121) 奄美考古学研究会2003『奄美考古－特集 宇宿小学校構内遺跡発掘調査報告－』第5号
- (122) 白木原和美1978『研究活動報告』3 熊本大学考古学研究室
- (123) 笠利町教育委員会1986『城遺跡・下山田遺跡・ゲジ遺跡』笠利町文化財報告書8
- (124) 鹿児島県教育委員会1988『下山田遺跡・和野トフル墓』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書45
- (125) 笠利町教育委員会1991『節田湊金久・万屋下山田遺跡』笠利町文化財報告書13
- (126) 鹿児島県教育委員会1985『長浜金久第Ⅱ遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書32
- (127) 鹿児島県教育委員会1988『長浜金久第Ⅱ遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書46
- (128) 鹿児島県龍郷町教育委員会1986『手広遺跡』龍郷町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書1
- (129) 鹿児島県龍郷町教育委員会2002『ウフタⅢ遺跡』龍郷町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書2
- (130) 九学会連合奄美大島共同調査会1959『奄美大島の先史時代』
- (131) 三宅宗悦1943「大隅国徳之島喜念原始墓出土貝製及び出土人骨の抜菌について」『考古学雑誌』第33巻10号 東京考古学会
- (132) 新里貴之2010「南西諸島における先史時代の墓制（Ⅱ）－トカラ列島・奄美大島－」『地域政策科学研究』第7号 鹿児島大学大学院人文社会科学研究所
- (133) 伊仙町教育委員会1988『喜念原始墓・喜念クバンシャ遺跡・喜念クバンシャ岩陰墓』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書7
- (134) 伊仙町教育委員会1986『ヨラク洞穴』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書6
- (135) 伊仙町教育委員会1985『面縄貝塚群 第1貝塚・第2貝塚・第3貝塚・第4貝塚』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書3
- (136) 伊仙町教育委員会2016『面縄貝塚総括報告書－平成19～27年度町内遺跡発掘調査等事業に係る発掘調査報告－』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書16
- (137) 伊仙町教育委員会2014『面縄貝塚群Ⅱ』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書15
- (138) 鹿児島県教育委員会2019『吐噶喇・奄美の遺跡－県内遺跡発掘調査事業に伴う河口貞徳コレクション発掘調査報告書（2）－』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告200
- (139) 白木原和美1970「徳之島の先史学的所見」『南日本文化』第3号 鹿児島短期大学
- (140) 伊仙町教育委員会1984『犬田布貝塚』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書17

掘調査報告書2

- (141) 上村俊雄・本田道輝1984「沖永良部島神野貝塚Cトレンチ発掘調査概報」『鹿大考古』第2号 鹿児島大学考古学研究室
- (142) 高宮廣衛・下地 傑・安里和美・大城広江1985a「沖永良部島神野貝塚発掘調査概報（その1）－Aトレンチ－」『沖国大考古』第7号 沖縄国際大学文学部考古学研究室
- (143) 高宮廣衛・玉城安明・照屋 孝・仲村ゆりか・山内盛尚1985b「沖永良部島神野貝塚発掘調査概報（その2）－Bトレンチ－」『沖国大考古』第8号 沖縄国際大学文学部考古学研究室
- (144) 高宮廣衛・仲宗根求・宮里信勇1987「沖永良部島神野貝塚発掘調査概報（その3）」『沖国大考古』第9号 沖縄国際大学文学部考古学研究室
- (145) 知名町教育委員会2014『神野貝塚』知名町埋蔵文化財発掘調査報告書第13集
- (146) 知名町教育委員会2006『住吉貝塚』知名町埋蔵文化財発掘調査報告書第10集
- (147) 沖縄県伊是名村教育委員会1993『具志川島遺跡群』伊是名村文化財調査報告書第9集
- (148) 沖縄県立埋蔵文化財センター2012『具志川島遺跡群－保存・活用のための発掘調査報告－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第64集
- (149) 伊是名村教育委員会1977『具志川島遺跡群』伊是名村文化財調査報告書第1集
- (150) 沖縄県伊是名村伊是名貝塚学術調査団編2001『伊是名貝塚－沖縄県伊是名貝塚の調査と研究－』勉誠出版
- (151) 岸本義彦2000「阿良第二貝塚」『沖縄県史』資料編10 沖縄県教育委員会
- (152) 伊江村教育委員会2017『カヤ原遺跡A地点・ナガラ原東貝塚・ナガラ原第三貝塚』伊江村文化財調査報告書第14集
- (153) 名護市教育委員会2005『大堂原貝塚：古宇利屋我地線建設に伴う緊急発掘調査報告書』名護市文化財調査報告第17集
- (154) 新田重清・嵩本正秀1960「嘉手納貝塚」沖縄県教育委員会監修『沖縄文化財調査報告1956～1962』那覇出版社
- (155) 北谷町教育委員会編1989『伊礼原B貝塚』北谷町文化財調査報告第8集
- (156) 北谷町史編纂委員会編1994「クマヤ－洞穴」『北谷町史』第3巻 史料編2 民俗下 北谷町
- (157) 沖縄県宜野湾市教育委員会編2005『嘉数テラガマ洞穴遺跡』宜野湾市文化財調査報告書第35集
- (158) 浦添市教育委員会1990『城間古墓群』浦添市文化財調査報告書
- (159) 大山 柏1922『琉球伊波貝塚発掘報告』
- (160) うるま市教育委員会2014『平敷屋トウバル遺跡－ホワイトビーチ地区燃料施設建設工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書－』うるま市文化財調査報告第22集
- (161) 高宮廣衛・山内勝美・下地安広1981「室川貝塚第3～5次発掘調査概報」『沖国大考古』第5号 沖縄国際大学文学部考古学研究室
- (162) 知念町教育委員会2002『熱田原貝塚』知念町文化財調査報告書第10集

- (163) 島田貞彦1932「琉球崎樋川貝塚」史学地理学同致会編『歴史と地理』第30巻5号 星野書店
- (164) 松下孝幸2009「沖縄県糸満市摩文仁ハント原遺跡発掘調査報告（1）」『土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究紀要』第4号 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
- (165) 沖縄県教育庁文化課編1982『古座間味貝塚』沖縄県文化財調査報告書第43集
- (166) 山崎真治・黒住耐二・國木田大2016「渡嘉敷村船越原採集のオオツタノハ遺体の産状と年代について」『慶良間諸島の遺跡－平成22～27年度県内遺跡詳細分布調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第81集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- (167) 山崎真治2018「渡嘉敷村船越原におけるオオツタノハの産出層準について」『沖縄県立博物館・美術館博物館紀要』第11号 沖縄県立博物館・美術館
- (168) 沖縄県立埋蔵文化財センター2016『慶良間諸島の遺跡』沖縄県立埋蔵文化財調査報告書第81集
- (169) 石巻市教育委員会1988『五松山洞窟遺跡』石巻市文化財調査報告書第3集
- (170) 飯島義雄・外山和夫・宮崎重雄1994「群馬県八束涇洞窟遺跡における貝製装飾品の意義」『群馬県立歴史博物館紀要』第15号 群馬県立歴史博物館
- (171) 今村啓爾編2015『群馬県多野郡神流町岩津保洞窟遺跡の弥生時代埋葬』帝京大学文学部史学科
- (172) 鈴木素行・色川順子2008「部田野のオオツタノハ－差込遺跡の土器棺から検出された貝輪について－」『ひたちなか市埋文だより』第28号 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター
- (173) 鈴木素行2010「続・部田野のオオツタノハ－茨城県域における弥生時代「再埋葬後」の墓制について－」『古代』第123号 早稲田大学考古学会
- (174) 財団法人茨城県教育財団1995『差込遺跡』茨城県教育財団調査報告第103集
- (175) 銚子市教育委員会1970『銚子市赤塚古墳』
- (176) 夷隅郡教育委員会1983『東前横穴古墳群』
- (177) 君津郡市考古資料刊行会1996『千葉県君津市 市宿横穴墓群発掘調査報告書－横穴墓埋葬様式の復元－』
- (178) 市原市文化財センター1989『千草山・東千草山遺跡』市原市文化財センター調査報告書第29集
- (179) 千葉県教育振興財団2014『四街道市 御山遺跡（2）』千葉県教育振興財団調査報告第726集
- (180) 赤星直忠1925「相州鴨居の横穴（二）」『考古学雑誌』第15巻9号 考古学会
- (181) 赤星直忠1927「三浦記（一）」『考古学雑誌』17巻4号 考古学会
- (182) 横須賀市2000「鳥ヶ崎横穴墓群」『新修横須賀市史』別編考古
- (183) 横須賀市自然・人文博物館1996「住吉神社洞穴遺跡」『考古資料図録XI』
- (184) 赤星直忠1927『三浦半島発見遺物図輯－鴨居・佐島－』
- (185) 赤星直忠1929「相州佐島横穴」『考古学雑誌』第19巻2号

- 考古学会
- (186) 横須賀市2000「御浦崎横穴墓群【佐島横穴墓群】」『新修横須賀市史』別編考古
- (187) 赤星直忠博士文化財資料館2015『雨崎洞穴－三浦半島最古の弥生時代海蝕洞穴遺跡－』
- (188) 三浦市教育委員会1997『大浦山洞穴』三浦市埋蔵文化財発掘調査報告書第4集
- (189) 神奈川県立博物館1975「間口洞窟遺跡（3）」『神奈川県立博物館発掘調査報告書』第9号
- (190) 赤星直忠1953「海蝕洞窟－三浦半島に於ける弥生式遺跡－」『神奈川県文化財調査報告』第20集 神奈川県教育委員会
- (191) 三宅島ココマ遺跡学術調査団2009『東京都三宅島ココマ遺跡発掘調査報告書』島の考古学研究会調査研究報告書1
- (192) 氷見市2002『氷見市史』7 史料編5 考古
- (193) 斎藤 優1960『足羽山の古墳』福井市教育委員会
- (194) 木下尚子2011「南方遺跡と弥生時代の『貝の道』」『2011年度岡山市埋蔵文化財センター特別講座資料』岡山市教育委員会
- (195) 松崎寿和・潮見 浩1961「広島県中山貝塚」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会
- (196) 鹿島町教育委員会・古浦遺跡調査研究会2005『古浦遺跡』
- (197) 木下尚子1998「日本出土貝製腕輪地名表」甲元眞之編『環東中国沿岸地域の先史文化』考古学資料集4
- (198) 福岡市教育委員会1996『姪浜遺跡2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第478集
- (199) 佐賀県教育委員会1973『大友遺跡発掘調査概報（図録編）』
- (200) 高倉洋彰1975「右手の不使用－南海産巻貝腕輪着装の意義－」『九州歴史資料館研究論集』1 九州歴史資料館
- (201) 呼子郷土史研究会1981『大友遺跡』呼子町文化財調査報告書第1集
- (202) 小田富士雄1970「五島列島の弥生文化－総説編－」『人類学考古学研究報告』2号 長崎大学医学部解剖学教室
- (203) 桑山龍進1941「大浜出土甕棺内にありし貝製品」『人類学雑誌』第56巻9号 日本人類学会
- (204) 酒詰伸男1964「長崎県大浜遺跡の発掘調査概報」『昭和37・38年五島遺跡調査報告』長崎県文化財調査報告書第2集 長崎県教育委員会
- (205) 西都原考古博物館2005『特別展図録 貝の来た道－東の道は存在したか－』
- (206) 高城町教育委員会2005『牧之原遺跡群』高城町文化財調査報告書第20集
- (207) えびの市教育委員会2010『島内地下式横穴墓群2』えびの市埋蔵文化財調査報告書第49集
- (208) 宮崎県教育委員会1977『昭和51年度宮崎県文化財調査報告書』第19集
- (209) 宮崎県教育委員会1980「IV. 日守地下式横穴54－1～4号発掘報告」『宮崎県文化財調査報告書』第22集
- (210) 宮崎県教育委員会1981「IV. 日守地下式横穴55－1～4号発掘報告」『宮崎県文化財調査報告書』第23集
- (211) 宮崎県西諸縣郡高原町教育委員会1991『立切地下式横穴墓群』高原町文化財調査報告書第1集
- (212) 河口貞徳1965「鹿児島県高橋貝塚」『考古学集刊』第3巻2号 東京考古学会
- (213) 河口貞徳1973「鋳形石の系譜」『古代学研究』第70号 古代学研究会
- (214) 大崎町教育委員会2018『大園・浜牧・蓼池・飯隈遺跡群』
- (215) 河口貞徳1973「上能野貝塚発掘概要」『鹿児島考古』第7号 鹿児島県考古学会
- (216) 木下尚子編2013『ナガラ原東貝塚の研究』熊本大学文学部考古学研究室
- (217) 西之表市教育委員会1972『上能野貝塚発掘概報』
- (218) 熊本大学文学部考古学研究室1980『馬毛島埋葬址－西之表市椎ノ木遺跡－』研究室活動報告6
- (219) 国分直一・盛園尚孝2001「阿嶽洞窟遺跡の調査」甲元眞之編『環東中国沿岸地域の先史文化（第4編）』考古学資料集24 熊本大学文学部考古学研究室
- (220) 中種子町教育委員会1996『種子島鳥ノ峯遺跡－鹿児島県熊毛郡中種子町所在埋葬遺跡の調査－』中種子町埋蔵文化財調査報告書2
- (221) 広田遺跡学術調査研究会2003『種子島 広田遺跡』
- (222) 笠利町教育委員会1995『用見崎遺跡』笠利町文化財調査報告第20集
- (223) 山田康弘・原田範昭1995『研究室活動報告』31 熊本大学考古学研究室
- (224) 笠利町教育委員会2005『安良川遺跡』笠利町文化財調査報告書第27集
- (225) 笠利町教育委員会2006『マツノト遺跡』笠利町文化財調査報告書第28集
- (226) 河口貞徳1978「サウチ遺跡緊急発掘調査報告書」『鹿児島考古』第12号 鹿児島県考古学会
- (227) 鹿児島県教育委員会1985「長浜金久第Ⅰ遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書32』
- (228) 鹿児島県教育委員会1986「長浜金久第Ⅳ遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書42』
- (229) 沖縄県立埋蔵文化財センター1989『宇佐浜遺跡』沖縄県文化財調査報告書第93集
- (230) 本部町教育委員会2005『瀬底島・アンチの上貝塚発掘調査報告書』本部町文化財調査報告書3
- (231) 沖縄県教育委員会1985『伊江島具志原貝塚の概要』沖縄県文化財調査報告書第61集
- (232) 沖縄県教育委員会1997『伊江島具志原貝塚発掘調査報告』沖縄県文化財調査報告書第130集
- (233) 藤江 望1998「1. ナガラ原東貝塚」『考古学研究室報告』第34集 熊本大学考古学研究室
- (234) 伊江村教育委員会2017『カヤ原遺跡A地点・ナガラ原東貝塚・ナガラ原第3貝塚』『伊江村文化財調査報告書』第14集
- (235) 伊江村教育委員会1977『沖縄県伊江島ナガラ原西貝塚の試掘調査』伊江村文化財調査報告書第3集
- (236) 伊江村教育委員会1979『伊江島ナガラ原西貝塚緊急発掘調査報告書』伊江村文化財調査報告書第8集
- (237) 鹿児島県歴史資料センター黎明館2003『平成14年度黎明館

- 企画特別展広田遺跡史料収蔵記念 海を渡った人々～貝製装身具と古代の祈り～』
- (238) 北谷町教育委員会2008『伊礼原B遺跡・伊礼原E遺跡』北谷町文化財調査報告書第27集
- (239) 北谷町教育委員会2008『伊礼原D遺跡』北谷町文化財調査報告書第28集
- (240) 北谷町教育委員会2013『伊礼原D遺跡』北谷町文化財調査報告書第35集
- (241) 北谷町教育委員会2014『伊礼原遺跡』北谷町文化財調査報告書第36集
- (242) 浦添市教育委員会1991『嘉門A貝塚』浦添市文化財調査報告書第18集
- (243) 浦添市教育委員会1993『嘉門B貝塚』浦添市文化財調査報告書第21集
- (244) 土肥直美2008『具志川グスク崖下地区の発掘調査－沖縄先史時代からグスク時代への移行期解明を目指して－』
- (245) 沖縄県教育委員会1996『平敷屋トウバル遺跡』沖縄県文化財調査報告書第125集
- (246) 盛屋 孝ほか2008『平敷屋トウバル遺跡』在沖米海軍艦隊活動指令施設部
- (247) 嵩元正秀1961『津堅貝塚発掘概報』『沖縄文化財調査報告 1956～1962』那覇出版社
- (248) 勝連町教育委員会2005『津堅貝塚』勝連町の文化財第23集
- (249) 沖縄県教育委員会1995『北原貝塚発掘調査報告書』沖縄県文化財調査報告書第123集
- (250) 具志川村教育委員会1989『沖縄県・久米島具志川村 清水貝塚発掘調査報告書』具志川村文化財調査報告書第1集
- (251) 新里貴之2011「南西諸島における先史時代の墓制(Ⅲ)－沖縄諸島－」『地域政策科学研究』第8号 鹿児島大学大学院人文社会科学研究科
- (252) 忍澤成視2017「縄文人を魅了した貝アクセサリ－」『縄文の奇跡 東名遺跡－歴史をぬりかえた縄文のタイムカプセル－』雄山閣
- (253) 金子浩昌1988「加曾利貝塚出土の動物遺物からみた食料と道具の諸問題」『千葉市加曾利貝塚博物館開館20周年記念特別講座講演集』千葉市加曾利貝塚博物館
- (254) 山口信義・中村利至久2010『蒲生石棺群』北九州市埋蔵文化財埋蔵文化財調査報告書第425集 財団法人芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室
- (255) 春成秀爾2021「8 石器・石製品・貝製品・骨角製品」『特定研究 日本に歴史における地域性の総合的研究－古代東国の地域性 千葉県荒海貝塚の発掘調査』国立歴史民俗博物館研究報告 第227集 国立歴史民俗博物館
- (256) 五木田大樹・鈴木加津子・鈴木正博1979「先史時代の水海道(Ⅰ)－金土貝塚資料編(Ⅰ)－」『常総台地』11 常総台地研究会
- (257) 栗島義明・別所鮎実2020「冬木A貝塚のオオツタノハ製貝輪－貝輪収納事例と派生する問題－」『埼玉考古』第55号 埼玉考古学会
- (258) 財団法人茨城県教育財団1981『冬木地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書－冬木A貝塚・冬木B貝塚－』茨城県教育財団文化財調査報告Ⅹ
- (259) 財団法人千葉県教育振興財団2008「千葉ニュータウン37－千葉市六通貝塚－」『千葉県教育振興財団調査報告書』第572集
- (260) 横浜市歴史博物館2012『企画展 海にこぎ出せ！弥生人』
- (261) 上守秀明2000「白井大宮台貝塚」『千葉県の歴史』資料編考古1 (旧石器・縄文時代) 千葉県
- (262) 近森 正1983『佐倉市吉見台遺跡発掘調査概要Ⅱ』佐倉市遺跡調査会
- (263) 春成秀爾・設楽博己・竹中正巳2021「鹿児島県宝島大池遺跡B・C遺跡の発掘調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第221集 国立歴史民俗博物館
- (264) 木下尚子・坂本 稔・瀧上 舞2020「鹿児島県宝島大池遺跡B地点出土貝塚前期人骨等の年代学的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第219集 国立歴史民俗博物館

図版出典

図1～図7 田嶋作成。表1～表15 田嶋作成。

【勤務先】〒703-8284 岡山市中区網浜834-1
岡山市埋蔵文化財センター

表9 縄文時代オオツタノハ製貝輪・製品出土遺跡一覧表(1)

(腕: 腕輪 製: 貝輪以外の製品 自: 自然遺物 集: 貝集積遺構 ●: 出土) ※番号は図6に対応。

番号	遺跡名	所在地	文献記載出土総数	遺構類型別出土数								環状品の状態		半環状品	半環状品(組合せ式)の穿孔部位と穿孔数					その他製品	素材等の有無	残骸等の有無	イモガイ科	タカラガイ科	ゴホウワ	時期 (奄美・沖縄地方は、 下段に貝塚時代区分 も並記。またぐ時は 新しい方で集計)	備考 (特に断りがない限り貝輪の主語は、基本的にオ オツタノハ製貝輪及び製品を示す)	引用 文献 (集文)		
				1 類	2 類	3 類	4 類	5 類	6 類	7 類	8 類	完形	破片	多 孔 品	製品	片側一	片側二	両端一	両端二	両端三	両端四	その他製品	素材等の有無	残骸等の有無	イモガイ科	タカラガイ科	ゴホウワ			
1	有珠モシリ遺跡(16号墓)	北海道伊達市	2		2							2															晩期後葉 (大洞A式)	合葬土壙墓A人骨成人女性左前腕にベンケイガイ製4点。同製半環状品2点と着装。同B人骨成人女性(抜歯有)左前腕にベンケイガイ製1点と着装。研磨。胸上で前腕交差。	1	
2	入江貝塚C地点	北海道洞爺湖町	1	1										1		1										製	後期初頭 (天佑寺式)	本来両端一穿孔。研磨。イモガイ製玉。	2	
3	戸井貝塚	北海道函館市	1	1									1	1												製	後期初頭 (天佑寺式)	2/3残存。未製品。タカラガイ・イモガイ製垂飾(時期不明)	3	
4	二子貝塚	岩手県久慈市	1	1									1														晩期中葉	研磨。他にコハク製品。	4ab, 5, 6	
5	門前貝塚	岩手県陸前高田市	1	1																						製	中期～後期	陸前小友貝塚として報告。他にベンケイガイ2点着装成人男性人骨。	6, 7, 8	
6	貝島貝塚	岩手県一関市	2	2								1			1		1									自	製	後末～晩期 (安行2a～大洞A)	半環状1。破片1(1/3残)。他にイモガイ形土製品1。自然遺物1点は、晩期。	9
7	館貝塚	宮城県栗原市	2	2											2													後～晩期	半環状(2/3残)2点。動物形骨製品。	10
8	富崎貝塚	宮城県登米市	2	2											2	1	1	1										後期後葉～晩期初頭	端部一部欠損。元は両端1と2ヶ所穿孔可能性有。研磨。	11
9	田柄貝塚	宮城県気仙沼市	1	1											1					1						製	後期後葉 (宮古Ⅲa)	研磨。タカラガイ製品は後期。沈線棒状石製品1。	12	
130	中沢貝塚	宮城県大崎市	1	1									1															2/3残。晩期前葉。	大洞BC式	6
10	南境貝塚	宮城県石巻市	9	9								6			3	1	2									製		中期末～後期前葉 (大木9～宮古1b)	中期末4点。後期初頭～前葉5点。タカラガイ製品中期末(ハチジョウタカラ1)。他にアマオブネ製品。	13
11	沼津貝塚	宮城県東松島市	2	2								1			1		1											中期後半～晩期後葉	半環状1。破片1(2/3残)。研磨。(大木8b～大洞A)。	14, 15
12	里浜貝塚	宮城県東松島市	7	7								3			3		1									製	晩期中葉 (大洞C式)	その他製品は垂飾または方形貝玉。イモガイ製品は晩期。	16	
13	左道貝塚	宮城県七ヶ浜町	1	1																					自		早期末～前期初頭 (上川Ⅱ式)	自然遺物。集落は前期に廃棄され、大木間貝塚へ移動・継続。	17	
14	水浜遺跡		1	1																					自		晩期末～弥生中期	弥生土器、骨角器。	18	
15	南高野貝塚	茨城県日立市	12						12		7	5	12															後期前葉 (堀之内Ⅰ式)	完形5・ほぼ完形2。小児骨共伴。外縁強い敲打調整3点。	6, 19, 20
16	上の内貝塚	茨城県ひたちなか市	2	2								1			1	1												中期後半	穿孔1ヶ所(両側穿孔)。打削研磨。破片1(1/4残)。加曾利EⅠ～Ⅳ。	21
17	冬木A貝塚	茨城県五霞町	14				14					14																後期前葉 (堀之内Ⅰ式)	完形。研磨。オオツタノハ以外7点(サトウガイ)との合計21点土器埋納。	23, 257, 258
18	金土貝塚	茨城県常総市	2	2								1			1	1										製	後期中葉～後半 (加曾利BⅠ～3)	両端穿孔の可能性有。研磨。イモガイ製品は後期。	24, 250	
19	神生貝塚	茨城県つくばみらい市	3	3								2			1		1									製	後期中葉～後半 (加曾利BⅠ～3)	両端穿孔1。未塗り2点有。イモガイ製品は後期。	6, 25, 26, 27	
20	上境旭台貝塚	茨城県つくば市	4	2	2							1			3		3									製	後期後半 (安行2a式)	半環状品3(17号B住居。第1号貝層1区混貝土層。第3貝層)。破片1(19C号住居床面、1/2残)。第3貝層出土は加曾利B～安行3b式。イモガイ製品は後・後～晩・前。研磨。アメーバ状砥石(第2号貝層出土)。	28, 29	
21	中妻貝塚	茨城県取手市	2	1	1							1	1													製	後期前葉・中葉	破片1(加曾利B)。ほぼ完形1(被熱・96体埋葬A32土壙墓出土。堀之内2式)。イモガイ製品は後期。	30, 31	
22	立木貝塚	茨城県利根町	1	1						1																		堀之内～安行	貝種として採集報告。	27
23	興津貝塚	茨城県美浦村	1	1								1																前期後半	2/3残存。研磨。	32
24	広畑貝塚	茨城県稲敷市	1	1								1																後・中～晩・初	加曾利BⅠ～安行3式。一部研磨。アメーバ状砥石。近くの上高津貝塚でも同砥石出土。	6, 33
25	荒海貝塚	千葉県成田市	2	2									2	1												製	後～晩期	下端磨れ。上端磨。1点は、内径面研磨無し。	6, 32, 255	
26	荒海川表遺跡	千葉県成田市	3	3									3															晩期末(荒海式)	貝層上面出土。破片3(1/2・1/4残)。殻縁部分研磨。	34
27	鹿台遺跡		1									1	1	1														後～晩期	完形。輪幅広。未製品か。遺構不明。	35
28	白井大宮台貝塚(旧・白井藩)	千葉県香取市	1									1		1														早期後半～中期前葉	表採。加工品。記載のみ。茅山下層～阿玉台。	27, 260
29	白井大宮台貝塚(A地点)		1	1											1													中期初頭	破片1(1/3残)。研磨。下小野式・五領ヶ台式。	32, 260
30	白井大宮台貝塚(D地点)		1	1										1														中期前葉 (阿玉台式)	破片1。研磨。	36, 260
31	良文貝塚		1	1																								中期前葉～後期末	加工品として記載(集文27)。阿玉台～安行2式。	27, 37
32	余山貝塚	千葉県鏡子市	1	1								1															後期中葉～末(加曾利BⅠ～安行1式)	加工品。最大幅6cm。研磨。旧江見忠功(水鏡)収集品。1916年京都帝国大学文学部購入。他にマルザルボウ貝輪15点と魚類尾端埋納精製土器1個。アメーバ状砥石、小型棒状ハンマー、礫器出土。	27, 38, 39, 40	
33	牛熊貝塚	千葉県横芝町	1									1																後期中葉～末	出土遺構不明。1/3残。加曾利B～安行2式。	41
34	養安寺遺跡	千葉県東金市	1	1									1															中期中葉 (加曾利EⅡ式)	1/2残存。環の内外縁研磨。若干彩色残る。斜面堆積貝塚SS009出土。	42
35	安房神社境内洞窟遺跡	千葉県館山市	10	10								2	2															晩期末(五貫森式・大洞A式)	完形2(1点は千葉大二次調査CD区C7グリッド4層出土)。	4ab, 43ab, 44, 45, 46
36	鉾切洞窟遺跡		1	1									1													製	製	後期初頭 (称名寺式)	1/2残。EトレンチⅢ区砂土層出土。イモガイ・タカラガイ製品は後期。	47
37	竹岡村洞口貝塚	千葉県富津市	1	1																								縄文?～弥生	散乱人骨と共伴。	6, 48
38	山野貝塚	千葉県袖ヶ浦市	1	1								1																後期前葉～末	完形1。研磨。堀之内Ⅰ～安行2。	49
39	祇園原貝塚	千葉県市原市	2	1											1		1									製	製	堀之内Ⅰ～安行2式	研磨。イモガイ製品住居内貝層出土。タカラガイ製品土坑内貝層出土。後期。	50
40	西広貝塚	千葉県市原市	15	15								10			5	2	3										製	後期前葉～末 (堀之内Ⅰ～安行2)	両端穿孔3。片側穿孔1。穿孔不明1。研磨。タカラガイ製品は後～晩期。1点はヤツシロガイイ。	51
41	武士遺跡	千葉県市原市	1	1								1																中期末～後期初頭	加曾利EⅣ～称名寺1式。研磨。他にベッコウイモ製。有溝砥石出土。	52
42	八木原貝塚	千葉県四街道市	1	1											1		1											加曾利BⅠ～B3式	穿孔部上部を少し欠損。殻表面は未加工。窪みに赤彩痕。	53
43	六通貝塚		1	1												1	1											後期前葉～末	両端穿孔1。アメーバ状砥石・棒状ハンマー出土。	253, 259
44	有吉北貝塚	千葉県千葉市	2									1			1	1										製	製	中期中葉 (阿玉台Ⅲ～中峙式)	半環状品1(土坑SK845の3層出土。研磨)。破片1(1/3残。住居S996Bピット2出土。研磨)。タカラガイ・イモガイ製品は同時期。	54
45	加曾利南貝塚		5						5		4	1	5													製	後期中葉～後葉(加曾利BⅠ～B3式)	第Ⅳトレンチ3区66-51グリッド5点一括集出土(4点殻表が上で重視。1点胴縁部が上の状態)。研磨修復痕。有機質炭保管か。タカラガイ製品は後期。赤彩。	8, 55	
46	加曾利北貝塚		2	2								2															製	中期中葉	破片2。タカラガイ製品は後期。加曾利EⅡ式。	6, 56
47	加曾利貝塚		1	1											1		1									製	中期～後期	両端穿孔1。赤彩・ヤクシマダカラ。	8, 57	
48	吉見台貝塚	千葉県佐倉市	1	1											1		1									製	後期後半～末	アメーバ状砥石。棒状ハンマー。	58, 262	
49	中野木新山		1									1																中期後半	ピット内廃棄貝層出土(加曾利EⅣ式)。	59
50	古作貝塚	千葉県船橋市	9				9					9														製	後期前葉 (堀之内Ⅰ式)	第1号土器にベンケイガイ製20。サルボオ製3と埋納。タカラガイ製品は後期。	8, 60, 61	

表10 縄文時代オオツタノハ製貝輪・製品出土遺跡一覧表(2)

(腕: 腕輪 製: 貝輪以外の製品 自: 自然遺物 集: 貝集積遺構 ●: 出土) ※番号は図6に対応。

番号	遺跡名	所在地	文献記載出土総数	遺構類型別出土数								環状品の状態		半環状品	半環状品(組合せ式)の穿孔部位と穿孔数					その他製品	素材等の有無	残骸等の有無	イモガイ科	タカラガイ科	ゴホウワ	時期 (奄美・沖縄地方は、 下段に貝塚時代区分 も並記。またぐ時は 新しい方で集計)	備考 (特に断りがない限り貝輪の主語は、基本的にオ オツタノハ製貝輪及び製品を示す)	引用 文献 (集文)				
				1 類	2 類	3 類	4 類	5 類	6 類	7 類	8 類	完形	破片	未 成 品	製品	片側一	片側二	両端一	両端二										周縁三	周縁四		
51	蛇山貝塚	千葉県市川市	1	1								1														中期中葉～中葉	C地点出土。2/3残。	62				
52	曾谷貝塚 D地点		1			1							1													製	後期前葉 (加曾利B1式)	半分残。D地点SH37より出土。内外縁切断研磨。 イタボガキ未製品93点埋納土坑1基(中期)。	63, 64			
53	堀之内貝塚		1	1							1															製	後期前葉～末 (堀之内～安行)	酒詰1961では「ツタノハ」加工品で記載。タカラガイ製品は中期～後期。	8, 27, 48			
54	根本内貝塚	千葉県松戸市	1			1						1															中期中葉 (阿玉台Ⅱ式)	20号住居内貝層出土。表面研磨。2/3残。	65			
55	上新宿貝塚	千葉県流山市	2	2							1		1				1										後期中葉 (賀曾利B1式)	表面赤彩1点。	48, 66, 67, 68			
56	真福寺貝塚	埼玉県 さいたま市	3	2						1	3																晩期前半	表採と國學院大學所蔵品完形(外面虫食い・フジツボ、内面調整)。	6, 69			
57	白岡町出土品	埼玉県白岡町	1	?						1	1																晩期	完形。樋口清之寄贈品。研磨なし。貝塚か?	6			
58	西ヶ原貝塚	東京都北区	6	6							1	3				2	1	1									後期	半片側1ヶ所穿孔1。片側2ヶ所穿孔1(これらは垂飾か)。研磨。ヤコウガイ製貝匙1。	70, 71, 72			
59	小豆沢貝塚	東京都板橋区	2							2						1	1											後期前葉～末 (堀之内～安行2)	研磨。下端部に穿孔1。上部欠損品。本来は穿孔有。表採。(集文27)加工品として記載のみ。	27, 48, 73		
60	大森貝塚	東京都品川区	1			1					1																加曾利B1～安行3C式	ヘビガイ付着。内面未調整。5号住居内貝層(南貝層)出土。後期中葉～晩期初頭。	74			
61	下沼部貝塚	東京都大田区	1							1																	後期前葉～末 (堀之内1～晩末)	加工品として報告(堀之内～安行2)。表採。	27			
62	下高洞遺跡 D地区	東京都大島町 (伊豆大島)	30	30							1	●	1														有	有	製	製	素材、未成品。破片。イモガイ・タカラガイ製品も同時期。イボシマモ。	8, 75, 76, 77
63	渡浮根遺跡	東京都新島村	3	3							1	2	3															後～晩期	完形1。破片1。	78		
64	宮の原貝塚	神奈川県 横浜市	1	1								1																中期中葉	北貝塚第1貝層(第5層混土貝層)。加曾利E1～勝坂式。	79		
65	杉田貝塚		1	1																								中期中葉～後期末	(集文80)で安房神社境内洞窟で頻例としてあげている。勝坂～安行1。	6, 80		
66	称名寺貝塚		1	1								1																称名寺1～堀之内	B貝層。半分残。	81		
67	青ヶ台貝塚	神奈川県 横浜須賀市	1	1								1																中・中～後・前	半分残。研磨。	82, 83		
68	夏島貝塚		1	1																								縄文前期		6, 22, 84		
69	吉井城山 第1貝塚		1	1																							製	早期末(茅山上層)	1/2残。研磨。イモガイ製品の2点に赤彩。	85, 86		
70	火達山遺跡	静岡県下田市	1								1	1		1														晩期	砂丘に立地。表面採集。晩期の可能性高い。加藤賢二氏指示。	87, 88		
71	西貝塚	静岡県磐田市	1	1								1															後期後葉	破片。第4混土貝層出土。所在未確認。	89			
72	蛭塚遺跡	静岡県浜松市	2	1							1	1															後期後葉	破片1(混土貝層出土)。表採1。	90			
73	小竹貝塚	富山県富山市	1		1							1																前期後半(諸磯・北白川下層Ⅱb式)	半分残存。C区45号人骨(青年男性)付近出土。研磨。アメモハ状砥石。小型棒状礮器(ハンマー)出土。	91		
74	西屋敷貝塚	愛知県知多市	1	1								1																晩期前～中葉	1/2残。(大洞C1～C2並行)	92, 93		
75	大草南(東畑)貝塚		1	1							1																	晩期前半(雷式)	完形1。	94, 95		
76	吉胡貝塚	愛知県田原市	8	8								1	5		1		1										製	後期後半～晩期末	完形1。破片2(1点は昭和26年第二トレンチ出土。2/3残)。タカラガイは晩期。トウカムリ科?・ヤツシロガイ。オオツタノハ加工品記載のみ(集文27)。【田原市2007-II2T】破片4(研磨)。	27, 96, 97, 98		
77	伊川津貝塚		17	14	2							1	5	3		1			1				1				製	後期末～晩期末	完形3点(6-2号埋葬熟年女性人骨前腕付近2点と包含層1点:後期末～晩期初頭)。イタボガキ左殻製オオツタノハ腕輪模倣品1(晩期中葉)。包含層1点(後期末～晩期初頭)。包含層2点(両端穿孔含む・晩期中葉)。包含層1点(晩期後葉～弥生)。【2008年調査】5点。【2009年調査】1点。【2010年調査】1点。【2013年調査】2点。戦前分含めると20個超。タカラガイ製品は晩期。ヤツシロガイ。【1984年調査】小型棒状礮器(ハンマー)。手持ち砥石。有溝砥石【1992年調査】有溝砥石。小型多面体及び棒状砥石。【2009年調査】D区表土から完形1。他に有溝砥石。小型多面体及び棒状砥石。	100, 101, 102, 103		
78	保美貝塚		2	1							1	2																	後～晩期	南山大学斎藤寄贈資料1点。史前学研究所資料(昭和16年)1点。他に小型棒状礮器(ハンマー)38。手持ち砥石1。アメモハ状砥石1。	99, 100	
79	彦崎貝塚	岡山県岡山市	1	1								1				1												後期後半 (彦崎K2式)	1/3残。研磨。破片。垂飾に再利用途中か。本文参照。小型棒状礮器(ハンマー)。手持ち砥石出土。	104, 105		
80	津雲貝塚	岡山県笠岡市	1	1								1																後～晩期	内頸貝輪「ツタノハガイ」(穿孔内径横40mm×縦31mm)の記載(酒詰1941)。「ツタノハ」加工品(酒詰1961)【2014年調査】小型棒状礮器(ハンマー)。【2016年調査】手持ち砥石出土。	27, 48, 106		
81	岐志元村遺跡	福岡県糸島市	1			1						1																後期中葉 (北久根山Ⅰ式)	5層(堅穴住居埋土)出土。2/3残。研磨。	107		
82	東名遺跡	佐賀県佐賀市	7	7								7															製	早期末(塞ノ神式)	第1貝塚Ⅶ層1点・Ⅷ層2点・Ⅸ層2点・北トレンチ北27層1点・同48層1点(1/2残2点。1/4～1/3残5点)。虫食いや風化。他にタカラガイ・イモガイ製垂飾。	108, 109		
83	大友遺跡 (5次調査)	佐賀県唐津市	5		5							2	3															晩期末(夜白式)	8号支石墓の土壌墓:熟年女性右前腕2。左前腕3着装。完形1。ほぼ完形1。3/4残2。1/3残1点。他に2号支石墓1号遺物(弥生前期末:金海式)墓域西側から成人男性人骨とタマキガイ製組合せ貝輪3(両端穿孔1ヶ所完形2点。端部2ヶ所穿孔破片1点)非着装。骨製管玉1点出土。晩期末の土壌墓を遺物で切る。【6次調査】31号土壌墓(弥生前～中期)成人女性:左前腕ゴホウ製3点着装。	110, 111		
84	宇久松原遺跡	長崎県 佐世保市	4		4							4																晩期末(夜白式)	第1号土壌墓(熟年女性両腕に各2個着装)。左右で着装方向が異なる。全体及び部分研磨。両腕の大歯4本と下顎の切歯4本抜歯。	112		
85	一尾貝塚	熊本県天草市	1	1								1															製	自	後期前葉～中葉(出水式～北久根山式)	A-2区貝層4出土。2/5残。研磨。骨角器及び貝製装身具。西北九州型漁撈具やオサンリ型釣針等多量出土。	113	
86	荘貝塚	鹿児島県出水市	1	1							1		1															前期前葉(轟式)	2トレンチミニサブトレンチ純貝層。未成品。	114		
87	川上(市来)貝塚	鹿児島県いちき串木野市	1	1								1	1															後期中葉(市来式)	未製品。1/2残。	115		
88	小浜貝塚	鹿児島県西之表市	●	●								●	●														●		縄文前期後半 (貝塚前2期)	一定量の未加工貝類。貝輪未製品。曾畑式。生産遺跡。	252	

表11 縄文時代オオツタノハ製貝輪・製品出土遺跡一覧表(3)

(腕: 腕輪 製: 貝輪以外の製品 自: 自然遺物 集: 貝集積遺構 ●: 出土) ※番号は図6に対応。

番号	遺跡名	所在地	文献記載出土総数	遺構類型別出土数量								環状品の状態			半環状品	半環状品(組合せ式)の穿孔部位と穿孔数						その他製品	素材等の有無	残骸等の有無	イモガイ科	タカラガイ科	ゴホウラ	時期 (奄美・沖縄地方は、下段に貝塚時代区分も並記、またぐ時は新しい方で集計)	備考 (特に断りがない限り貝輪の主語は、基本的にオオツタノハ製貝輪及び製品を示す)	引用文献 (集文)	
				1類	2類	3類	4類	5類	6類	7類	8類	完形	破片	未成品		多製品	製品	片側一	片側二	両端一	両端二										周縁三
89	一降長崎鼻遺跡	鹿児島県 熊毛郡 南種子町	8	8									2	6	1													晩期後葉 (貝塚前5期)	殻頂下部に敲打による穿孔。研磨等なし。他にイモガイ珠。サメ歯垂飾。	116, 117	
90	宝島大池遺跡	鹿児島県 鹿児島郡 十島村	7	7									3	4	2													中期前～中葉 (貝塚前2期後半)	完形3(未製品2)、破片4(1/3・1/2・4/5残)。タカラガイ製垂飾・イモガイ製小珠。条痕文～室川下層式。	118	
91	大池遺跡 A地点		3	2			1						1		1													中期前～中葉 (貝塚前2期後半)	【1993年調査】N10G付近出土1点。室川下層式期。孔内面一部研磨。他にゴホウラ製貝輪、ヤコウガイ等の自然遺物多。【1994年調査】M5G2層1点(1/3残。表面荒い研磨)。18号遺構(土坑)1層1点(1/4残。丁寧な研磨)。製作遺跡。	119, 120	
92	宇宿小学校 構内遺跡		8	8										8														中期前～中葉 (貝塚前2期後半)	第3文化層出土。破片8(1/4・1/3・1/2残)。他にゴホウラ製腕輪等出土。	121	
93	宇宿高又遺跡		1	1										1													自	貝塚前2～3期後半	南区V層出土。3/5残。前・後～後期。	122	
94	城遺跡	鹿児島県 奄美市笠利町	1	1									1															後期後半 (貝塚前4期中～後葉)	V層出土。1/3残。研磨。面縄西洞式。嘉徳Ⅱ式。	123	
95	下山田Ⅱ遺跡		8	8									1	7														後期初頭面縄前庭式 (貝塚前3期後葉)	【第2地点】完形1(未製品)、破片7(1/3～1/2残。研磨6)。ゴホウラ製腕輪・イモガイ製品。集石遺構6基(珊瑚含むストーンボイル・石床炉)。人の部分骨(下顎骨A:壮年女性、抜歯有、時期不明)。小型棒状石器(ハンマー)、手持ち砥石。	124	
96	万屋下山田Ⅲ遺跡		7	7									4	3														後期前～中葉 (貝塚前3期後半～4期中葉)	面縄前庭式～嘉徳ⅠA式。完形4、破片3(2/3～3/4残)。研磨。アメーバ状砥石1。集石遺構7基(貝・炭化物・焼石含む)。	125	
97	長浜金久第Ⅱ遺跡		113	113									2	11														腕	面縄前庭式～面縄西洞式。アメーバ状砥石8点。住居(嘉徳Ⅰ式)、炉、土坑(貝殻・貝を含む)。	126	
		61	61									5	56													自	後期中葉 (貝塚前4期)	面縄東洞式・嘉徳Ⅰ式。研磨用荒砥石2点。アメーバ状砥石20点。破片に3ヶ所(以上)穿孔1点。多穿孔孔。	127		
98	手広遺跡	鹿児島県 大島郡能郷町	1									1		1														後期後半～晩期中葉 (貝塚前4期中～5期)	面縄西洞式・宇宿上層・喜念Ⅰ式。半分残。有溝砥石1。他に燧石製品・土製円盤(6層・夜臼式期)。焼煉集積遺構1基(土器・骨片・貝含む。D6区14層下層・嘉徳Ⅰ式)。黒住氏表式。	128	
99	ウフタⅢ遺跡		3	3									1		1												自	晩期～弥・前 (貝塚前5期～後1期)	仲原式～阿波連浦下層式。大洞A式変形工字紋類似土器2点(1号土坑出土)。石積面住居1軒(晩期)。土版形有溝土製品(仕上げ研磨用)。	129	
100	荒木農道 (荒木小学校) 遺跡		4	4									2	2															嘉徳Ⅱ式 (貝塚前4期中葉)	埋葬人骨。貝小玉とともに出土。後期後半。	130
101	喜念原始墓		32	32									16		1	1	7		2	5	5								晩期末～弥・中 (貝塚前5期末～後1期)	底型8点(2点紐孔有)。昭和10年京大3宅の調査で、南西諸島の技術人骨出土。着装無。3・4個重畳事例有。外面両端2穿孔+周縁穿孔3が5点。仲原式主体。	131, 132
102	喜念クバン ンヤ岩陰墓	4	4										3														1	晩期末～弥・前 (貝塚前5期末～後1期)	第2号墓:3点(1/2残1、破片2、内1点の外面に凹点文有)。3号墓:底型1。研磨。阿波連浦下層式。	132, 133	
103	瀬田浜遺跡	1										1																縄文時代	表探。伊仙町歴史民俗資料館展示。	134	
104	面縄第1貝塚	鹿児島県 大島郡伊仙町	9	1	8							3		1		1						1					自	後期中葉・市来式 (貝塚前4期前葉)	【牛ノ浜1985】散乱人骨間(C-5区V層)で8点検出のうち底型1、完形3、半環状1(片側穿孔4ヶ所、両側穿孔2ヶ所、本来は5ヶ所。紐ずれ痕)、図なし3。研磨。ゴホウラ製有孔焼煉土器1。【伊仙町2016】座下部BトレンチV層破片1(打削、研磨)。	135, 136	
105	面縄第2貝塚	鹿児島県 大島郡知名町	12	12								8				2	2										腕・製・自 腕・製・自	後期中葉嘉徳ⅠB、Ⅱ式(貝塚前4期中葉)	【九学連1959】破片2(1/2・2/3残)【伊仙町2014】6トレンチ2層破片1(1/2残。研磨)。【伊仙町2016】破片6、半環状1、うち時期不明4。【河口貞徳調査分】破片1・半環状1(1/3・1/2残)。片側1ヶ所1。研磨。時期不明。住居2軒(嘉徳Ⅱ式)。	130, 136, 137, 138	
106	大田布貝塚		2	2									1										1	自			腕	後期後半～晩期中葉 (貝塚前5期)	面縄西洞式・宇宿上層・喜念Ⅰ式。1/5残。6B3層出土。研磨。底型1。	139, 140	
107	神野貝塚		25	25									23				1		1								自・製	中期～後期中葉 (貝塚前2期後半～3期後半・4期前中葉)	【A-1区】破片1(1/4残・Ⅳ・V層出土)。【A-2区】破片7(1/5～1/2残。Ⅳ・V層出土)。【A-3区】破片7(周辺1ヶ所穿孔4、1/2～1/4残。Ⅳ・V層出土)。【B-3区】破片4(1/4～1/2残。Ⅱ・V層出土)。半環状1(V層)。【B-5区】破片1(1/2残。Ⅱ層)。穿孔途中不明未製品1(Ⅲ層)。2区5層人骨。【C区】破片2、ツタノハ穿孔品1【知名町H25調査】破片1(1/2残。2トレ6層出土)。	141, 142, 143, 144, 145	
108	住吉貝塚	鹿児島県 大島郡知名町	23	9	13							1		17			4	3	1								腕	後期後半～晩期末 (貝塚前4期後半～5期)	中期末～弥生前期初頭4点(2T包含層)、11・12号住居の2点・16T包含層の1点(後期後半)、4～6号・9号住居の11点・6T包含層の1点(晩期前半)。表探1。他に5号住居ゴホウラ製腕輪。時期不明1(九学連分)。【河口貞徳C4区】破片1(2/3残。研磨。宇宿上層式)。	130, 138, 146	
109	具志川島遺跡 群岩立遺跡		1	1									1																	A3区4層出土。2/3残。研磨。	147
110	具志川島遺跡 群岩立遺跡 西区	沖縄県 国頭郡伊江村	11	5	6							1				10	5	1			1	1					製	中期末～後期前葉 (貝塚前3期～4期)	【伊是名村1993】破片・半環状各1点(報図22-2・6)は第11号人骨取り上げ時に出土。半環状3点(報:図22-4・5同一個体。図23-1・3)は一括人骨92-18周辺より出土。図22-4と図23-1は被熱黒色。4・5に紐擦れ痕。半環状図22-7も被熱。半環状図23-2は、一括人骨92-14付近出土。周辺5穿孔1点。サメ歯模造品1点。【沖縄県2012】座葬墓の3G3・4層出土1点。片側穿孔。研磨。	147, 148, 251	
111	具志川島遺跡 群	沖縄県 国頭郡伊江村	1	1								1	1																後期(貝塚前4期)	2/3残。研磨。表探。	149
112	伊是名貝塚		1	1													1	1									腕・製	伊波式・萩堂式 (貝塚前4期後葉)	内縁側を研磨。本来両端に穿孔。但し上部は欠損。後期中～後葉。貝ブロック9基。住居1軒、集石1基。	150	
113	阿良第二貝塚		1	1													1												神野E式・伊波式	上端部一部欠損。後期中葉(貝塚前4期中葉)。サメ歯製品。柱穴ビット20基。	151
114	ナガラ原 第3貝塚		2	2									1		1		1				1						腕・製	後期中葉～晩期 (貝塚前4期後半～5期)	Ⅵ層出土。半環状1(両側穿孔)。未成品完形1(頂部敲打調整)。小型棒状石器(ハンマー)1、手持ち砥石1。双角状石器1。集骨1。土版墓1(サメ歯垂飾)。石棺墓(伸展葬人骨左手ゴホウラ貝輪1着装。自然貝)。Ⅵ層(後期後半・貝塚前4期):住居2軒。炉17基。大型焼成遺構1。	152	

表12 縄文時代オオツタノハ製貝輪・製品出土遺跡一覧表(4)

(腕: 腕輪 製: 貝輪以外の製品 自: 自然遺物 集: 貝集積遺構 ●: 出土) ※番号は図6に対応。

番号	遺跡名	所在地	文献記載出土総数	遺構類型別出土数量								環状品の状態			半環状品	半環状品(組合せ式)の穿孔部位と穿孔数							その他製品	素材等の有無	残骸等の有無	イモガイ科	タカラガイ科	ゴホウワ	時期 (奄美・沖縄地方は、 下段に貝塚時代区分も 並記。またぐ時は 新しい方で集計)	備考 (特に断りがない限り貝輪の主語は、基本的にはオ オツタノハ製貝輪及び製品を示す)	引用文 献 (集文)
				1類	2類	3類	4類	5類	6類	7類	8類	完形	破片	未成品		多孔品	製品	片側一	片側二	両端一	両端二	周縁三									
115	大倉原貝塚	沖縄県名護市	8	8								2	4	1														前～後期 (貝塚前2～4期)	7層(管型式・貝塚前2期前半):完形1(風化)、破片2(若干摩耗、研磨面無)・ゴホウワ製腕輪・タカラガイ科製品・イモガイ製品、6層(前2期後半)1,4層(前4期):破片1(研磨)、未製品1(中央穿孔)、不明3・ゴホウワ製腕輪。集石が1基。	153	
116	嘉手納貝塚	沖縄県仲瀬郡嘉手納町	1	1								1				1												縄文後期 (貝塚前4期)	垂飾か。本来は周辺に2以上。	154	
117	伊礼原B貝塚	沖縄県中頭郡北谷町	1	1								1																中期～後期後半 (貝塚前3～4期)	第3区Ⅷ層出土。光沢。年齢不明女性散乱人骨(同層)。室川下層式～伊波式。	155	
118	クマヤー洞穴遺跡		2	2								1	1															晩期中葉 (貝塚前5期)	破片1/2残。研磨。山崎氏指示。	156	
119	嘉数テラガマ洞穴	沖縄県宜野湾市	1	1								1																晩期末 (貝塚前5期)	O21・22グリッド5層上面出土。打割・研磨。	157	
120	城間古墓群	沖縄県浦添市	9	9								5	4															後期末～晩期前半 (貝塚前4期末)	全てA地区第9号陰陰墓出土。非着装。破片4(1/4～1/2残)。室川式。サメ歯垂飾。	158	
121	伊波貝塚	沖縄県うるま市	1	1												1	1											後期中葉伊波式 (貝塚前4期中葉)	半環状。片側穿孔。	159	
122	平敷屋トウバル遺跡		6	6									2	4	2													後期中葉～晩期末 (貝塚前期4・5期)	未製品は研磨はほぼ無。破片1/4・1/2残。研磨。他に土坑7基(土坑内に炭、アコヤガイ、イモガイ、枝珊瑚、軽石含む)。線刻画(嘉徳1式文様)石柱1点。	160	
123	室川貝塚	沖縄県沖縄市	1	1								1																後期後半大山式 (貝塚前4期後半)	T8・11層出土。1/3残。研磨。	161	
124	熱田原貝塚	沖縄県南城市知念村	3	3								3																後期中葉伊波式 (貝塚前4期中葉)	D地区1層出土。研磨。	162	
125	崎橋川貝塚	沖縄県那覇市	2	2								2																縄文後期	研磨。貝塚前4期。	163	
126	摩文仁ハンタ原遺跡	沖縄県糸満市	1	1								1																後期後半大山式 (貝塚前4期後半)	集骨3出土。2/3残。放射状研磨。	164	
127	古座間味貝塚	沖縄県島尻郡座間味村	18	18								3	15	3														後期中葉～後半 (貝塚前4期)・ 後期末～晩期前半 (貝塚前5期)	I区キ98G2・3層:完形(未成)2、破片11、不定形有溝底石2、礫器(伊波式・嘉徳1式)、II区遺構外:3点(完形未製品1、破片2)、住3軒(他履・製)、室川～カヤウチハンダ式、III区包含層:完形1(未成)、破片1(2/3残、研磨、挟り入)。1号住居内ゴホウワ(穿孔12、無穿孔10)集積土坑(貯蔵?)1基と黒色黒曜石割片1(黒川式期)、表採:棒状ハンマー1、礫器1、貝符1。「ツタノハガイ」食料残渣90点。	165	
128	船越原遺跡(第2地点)	沖縄県島尻郡渡嘉敷村	5	5																								中期前葉 (貝塚前2期後半)	小型の自然遺体。	166, 167	
129	阿波連浦貝塚		1									1																中期前葉 (貝塚前2期後半)	表採。	168	

表13 弥生時代～古墳時代オオツタノハ製貝輪・製品出土遺跡一覧表(1)

(腕: 腕輪 製: 貝輪以外の製品 自: 自然遺物 集: 貝集積遺構 ●: 出土) ※番号は図7に対応。

番号	遺跡名	所在地	文献記載出土総数	遺構類型別出土数量								環状品の状態			半環状品	半環状品(組合せ式)の穿孔部位と穿孔数					その他製品	素材等の有無	残骸等の有無	イモガイ科	タカラガイ科	ゴホウワ	時期 (奄美・沖縄地方は、下段に貝塚時代区分も並記。またぐ時は新しい方で集計)	備考 (特に断りがない限り貝輪の主語は、基本的にオオツタノハ製貝輪及び製品を示す)	引用文献 (集文)	
				1類	2類	3類	4類	5類	6類	7類	8類	完形	破片	未成品		多孔品	製品	片側一	片側二	両端一										両端二
1	五松山洞窟	宮城県石巻市	1	1						1																		6C後半～7C初頭	第5群人骨下部、角石群付近の堆積土出土。研磨。表面磨光。	169
2	八東腔洞窟	群馬県利根郡みなかみ町	11	11						10				1			1				1							弥生中期前半(野沢Ⅱ・須和田式並行)	集骨遺構。両端穿孔片割折れ(垂飾の可能性)。焼熱7、内1点は焼焦げ。研磨有6。マクラガイ貝玉あり。	170
3	岩津保洞窟	群馬県多野郡神流町	25	25						20	5			3		2												弥生中期前半(野沢Ⅱ・須和田式並行)	壮年女性1号土壙墓内3点(破片復元は完形2点この破片に穿孔有)。壮年女性2号土壙墓破片3点(左腕着装2点、胸上1点、右腕サトウガイ製完形2点着装)。5～7号再葬墓完形20点(青年男性5号人骨右仰臥屈葬位へ10点配置、その上へ性別不明乳児7号を置く。5号東側へ青年男性6号人骨を左仰臥屈葬し、その上へ10点置く。ケルン状に石を積んで深鉢と鹿角を置き、火を焚き、墓域埋め戻し)。	171
4	ムジナⅢa遺跡	茨城県ひたちなか市	8	8						4		4																弥生中期後葉(足洗2式)	土器棺内。完形1点、2/3～3/4残6点、破片1点。研磨。赤・銀色を呈す。小児以下用。5と同一遺跡。	21, 172, 173
5	差洗遺跡		2	2							2																	弥生中期後葉(足洗2式)	破片2。土器棺埋設第117号土壙の土器棺内。他にサトウガイ製腕輪片4点埋納。子どもの墓。小児以下用。	172, 174
6	赤塚古墳	千葉県鏡子市	1	1						1																		古墳後期	石棺内人骨着装(集文6)。集文175では確認できず。要検討。	6, 175
7	東前2号横穴墓 東前4号横穴墓	千葉県いすみ市	2	2						2																		7C前～中	左棺完形2点。	176
	市宿4号横穴墓		4	4						3	1																	7C中～8C初	4点(中央棺完形1、左棺完形3、破片1)。棺座出土。	
8	市宿4号横穴墓	千葉県君津市	2	2						1	1																	7C前葉	4号横穴墓棺座右小口部寄り完形1。内面摩耗。堆積土破片1、土玉1。散乱人骨3体。	177
9	東千草山遺跡	千葉県市原市	1		1						1																	弥生後期前葉(久ヶ原式)	住居内貝塚出土。1/2残。研磨。	178
10	御山遺跡	千葉県四街道市	4	4						1	3																	7C後半～8C	一辺9mの方墳の箱式石棺(SX054)の7体埋葬の棺内南西部の貝ブロック上で出土。完形1、1/2～2/3残3点。他に玉類・鉄鏃・刀子。	179
11	鴨井島ヶ崎横穴	神奈川県横浜須賀町	5	5						2	3																	古墳後期(6C?)	A横穴(完形1、2/3～3/4残2)、B横穴(完形1、1/2残1)。人骨と共伴。	15, 180, 181, 182
12	住吉神社裏洞穴		1	1						1																		古墳後期(6C?)	坑道工事の際に出土。横穴床面に貝敷。人骨数体出土。完形。	6, 183
13	佐島横穴		2	2							2																	古墳後期(6C?)	3号横穴出土。他に破片数点。	184, 185, 186
14	雨崎洞穴	神奈川県三浦市	3	3	●					1	2	3																弥生中期前半(須和田式)	破片、未成品。	187
15	大浦山洞穴		1	1						1	1																	弥生後期(久ヶ原式)	2Eボケット貝層出土。完形1、未製品。	188
16	間口洞窟		2	2						1	1	1																弥生中期後半・後期前葉	破片1(Ⅲ区10層・貝灰層出土)。完形未成品1。宮ノ台式期1点、久ヶ原式期1点。	189

表14 弥生時代～古墳時代オオツタノハ製貝輪・製品出土遺跡一覧表（2）

（腕：腕輪 製：貝輪以外の製品 自：自然遺物 集：貝集積遺構 ●：出土）※番号は図7に対応。

番号	遺跡名	所在地	文献記載出土総数	遺構類型別出土数								環状品の状態		半環状品	半環状品（組合せ式）の穿孔部位と穿孔数					その他製品	素材等の有無	残骸等の有無	イモガイ科	タカラガイ科	ゴホウラ	時期 (奄美・沖縄地方は、下段に貝塚時代区分も並記。また古時は新しい方で集計)	備考 (特に断りがない限り貝輪の主語は、基本的にオオツタノハ製貝輪及び製品を示す)	引用文献 (集文)		
				1類	2類	3類	4類	5類	6類	7類	8類	完形	破片		多未成品	製品	片側一	片側二	両端二										両端三	周縁三
17	毘沙門C洞窟	神奈川県三浦市	1	1							1	1															弥生後期前葉（久ヶ原式）	完形未成品1。	15, 190	
18	海外洞穴		2	2	●						2																弥生後期～古墳初頭	完形2。	8	
19	ココマ遺跡	東京都三宅村	157	157								1										有	有				弥生中期後半～後期前葉	素材、完形未成品1、殻頂部、筋痕付近、縁辺部。	8, 191	
20	大境洞窟	富山県永見市	≤2	2								2	●														弥生前期～中期中葉	未加工品や貝輪片多数。半分残。他にマクラガイ製垂飾。	192, 259	
21	龍ヶ岡古墳	福井県福井市	1	1		1					1														腕	腕	古墳前期（4C）末	完形。家形石棺内出土。根型貝輪。	72, 193	
22	南方遺跡	岡山県岡山市	1	1								1	1													腕	弥生中期前半	入来Ⅱ式土器出土。	194	
23	中山貝塚	広島県広島市	3	3								3														腕	弥生前～中期	完形3。研磨。	194, 195	
24	古浦遺跡	島根県松江市	3		3							3															弥生前～中期	2～3歳児（29号人骨）右手着装。	196	
25	小浜洞窟		1		1							1															弥生中期か	埋葬遺構。貝輪破片。	197	
26	蒲生30号石棺墓	福岡県北九州市	7	7								7															弥生前期	鉄製刀子1、人骨片（成年男子。右腕着装か）。丁寧な研磨。箱式石棺墓出土。	254	
27	蛭波遺跡	福岡県福岡市	1					1					1														弥生中期初頭	SK095土城出土。貝玉1。	198	
28	大友遺跡（2次・3次調査）	佐賀県唐津市	23	23								23													腕	弥生前期	2次1号配石墓（20歳女性：左右前腕各1着装。同46号土城墓（青年男性：左2・右3着装）。同47号敷石墓（老年女性：左2・右3着装）。同50号土城墓（50歳女性：左3・右4。青年女性：左3着装）。同69号配石墓（熟年男性：右手1着装）。他にゴホウラ製貝輪。同23号敷石墓（青年女性：左3・右3着装）。3次3号箱式石棺墓（熟年男性。右前腕ゴホウラ製3個着装。同11号（性別不明、ペンケイガイ製6個着装）。	199, 200, 201		
29	出津遺跡	長崎県長崎市外海町	1	1																							弥生前期後半～中期		197	
30	松原遺跡	長崎県佐世保市字久町	≤2	≤2																							弥生前期か	1号支石墓女性人骨着装。	202	
31	大浜遺跡	長崎県五島市大浜町	1	1	●							1															弥生中期～後期	A2-1区2層出土。本来丁型。外径約83mm×70mm。内径約60mm×50mm。図掲載無。	203, 204	
32	築山古墳	大分県大分市	12	12								12															5世紀中葉	箱式石棺（北棺）壮年女性人骨左右腕各6点着装。2/3～4/5残7点。1/2残5点。	72, 205	
33	牧ノ原箱式石棺	宮崎県北諸県郡高城町	3	3		3						3															古墳中期中葉	1号箱式石棺中央部熟年女性人骨腕付近。3点重なって出土。3片で1個体分。他に堅輪、鉄剣ノミ状工具各1、刀子3、布製品副葬。赤色顔料散布。	206	
34	島内ST101（地下式横穴墓）	宮崎県えびの市	2	2								2															古墳中期	2号人骨（熟年男性）右手1、1号人骨（性別不明熟年）左手1着装。3号人骨（壮年男性）の膝下は2号人骨の上に乗る。鉄剣1、鉄鏝3副葬。他の地下式墓でも貝輪出土。	207	
35	旭台9号地下式横穴墓		12	12								6	6														5世紀中葉	8個体分。性別不明人骨着装。	205, 208	
36	日守2号地下式横穴墓（II54-2号）		1	1		1						1															5世紀中葉	3個体分の人骨。どれに付属するかは性別とも不明。他に刀子（柄は、華巻後鹿角装）、箱入り剣、鉄鏝副葬。	209	
37	日守5号地下式横穴墓（II55-1号）	宮崎県西諸県郡高原町	4	4			4					4															5世紀中葉	1号熟年男性2号（鉄鏝2）、性別不明小児骨、3号壮年女性（左手4個着装、頭部に剣1、頭部施朱）。		
38	日守6号地下式横穴墓（II55-2号）		16	16								16															5世紀中葉	1号壮年男性（頭部施朱）、2号熟年女性（頭部施朱、右腕に16個着装）。墓部屋全体に施朱及び床面にシラス白土塗布後施朱。棚状施設及び床に多量の鉄剣・ヤリガンナ、鏝、鏝状、刀子。	210	
39	立切64号地下式横穴墓		4	4								4															5C中頃～6C代	小児人骨右腕、女性人骨左腕に各2個着装。顔面に赤色顔料塗布。奥壁付近鉄剣1、人骨頭部付近刀子5。	211	
40	高橋貝塚	鹿児島県南さつま市	6	6								5	1	6											腕	弥生前期初頭～前葉	B・Cトレンチ3・4層貝輪出土。製品2（2/3・完形、研磨）、未製品完形4（ヘビガイ付着）。有孔環、勾玉1点。他にゴホウラ製。砂丘。製作遺跡。	212		
41	松ノ尾遺跡	鹿児島県枕崎市	4	4								1	5												腕	腕	弥生後期前半（松ノ尾式）	完形1、破片5（2点完形の同一個体、3点別個体）、表裏研磨。他にゴホウラ製4、イモガイ製3点。砂丘。	213	
42	飯隈遺跡群第20号地下式横穴墓	鹿児島県曾於郡大崎町	2	2								2															古墳時代中期	性別不明人骨左手着装2（3/5・1/2残）。研磨。乳白色・薄桃色発色。	214	
43	伊関沖ヶ浜田遺跡		1	1								1															貝塚後期	研磨。弥生～古墳？	215	
44	海士泊遺跡		1																								貝塚後期	弥生～古墳？	216	
45	上能野貝塚	鹿児島県西之表市	4									2	2														古墳後期後葉（貝塚後1期）	完形2。研磨。	217	
46	椎ノ木遺跡		1	1								1	1										？		製		古墳後期後葉（貝塚後1期）	グリッド4～D第3層出土。未成品（中穿孔あり）。完形。食料残渣の可能性。他に人骨共伴イモガイ製品1点。	218	
47	阿嶽洞窟		3	3								3													腕	弥生前期～後期（中期前半：入来式主体）（貝塚後1期）	Ⅱ区及び貝層出土2点（1/2～3/5残。周辺部・表面研磨。後者剥離甚だし）。Ⅲ区1点（1/2残。入念研磨）。他にゴホウラ製1。	219		
48	鳥ノ峯遺跡	鹿児島県熊毛郡中種子町	23	23								10															製	弥生後期後半～古墳初頭（貝塚後1期）	3次調査1号熟年女性人骨右前腕着装5点（3個体分、1/3～1/2残。配石墓）。3次調査3号熟年女性人骨右前腕着装5点（3個体分、1/5～4/5残。配石墓）。3次調査6号b成年女性人骨右腕9、左腕4着装分は所在不明。同人骨は、貝符、有孔方形版、貝玉、ツノガイ・イモガイ製垂飾等の首飾も装着。	220
49	野間下田遺跡		1									1	1														不明	表採。外面一部研磨。	205	
50	広田遺跡	鹿児島県熊毛郡南種子町	218	6	212							194	24			1	1								腕・製	腕・製	弥生後期～古墳中期（貝塚後1期）	埋葬人骨着装（男女とも）。国内最多着装はC区14号成年女性総数37点（内左手16、右手19+ゴホウラ2）事例。	221	
51	大池遺跡B地点	鹿児島県鹿儿郡十島村	3		3							3															縄文後末～晩末（貝塚前4期末～5期）	ビーチロック製箱式石棺内熟年女性左手首3個着装。研磨。ゴホウラの白色意識。人骨年代測定により縄文晩期に集計。	119, 120, 263, 264	
52	用見崎遺跡	鹿児島県奄美市笠利町	1	1								1															古墳前期（貝塚後1期）	破片。1/5残。住居2軒。イモガイ製貝符1。	222	
			1	1								1														製	製	5～7世紀（貝塚後2期）	1/3残。表面荒い研磨。内縁端部摩耗平滑。Ⅶ層出土。兼久式。ホシダカラ集積。	223

表15 弥生時代～古墳時代オオツタノハ製貝輪・製品出土遺跡一覧表 (3)

(腕: 腕輪 製: 貝輪以外の製品 自: 自然遺物 集: 貝集積遺構 ●: 出土) ※番号は図7に対応。

番号	遺跡名	所在地	文献記載出土総数	遺構類型別出土数量								環状品の状態				半環状品	半環状品(組合せ式)の穿孔部位と穿孔数						その他製品	素材等の有無	残骸等の有無	イモガイ科	タカラガイ科	ゴホウラ	時期 (奄美・沖縄地方は、 下段に貝塚時代区分 も並記。またぐ時は 新しい方で集計)	備考 (特に断りがない限り貝輪の主語は、基本的にオ オツタノハ製貝輪及び製品を示す)	引用 文献 (集文)					
				1 類	2 類	3 類	4 類	5 類	6 類	7 類	8 類	完形	破片	未 成 品	多 孔 品		製品	片側一	片側二	両端一	両端二	両端三										両端四	両端五	両端六		
53	安良川遺跡	鹿児島県 奄美市笠利町	1	1								1																			製	古墳後期・7C前後 (貝塚後2期)	黒褐色砂層(第3層)出土。砂丘。ヤコウガイ 製品・フタ約1340点。イモガイ製貝輪・小玉出土。 表採4(完形1、破片3)、第一文化層出土9点 (破片4、完形5のうち素材1)。外面点刻み文有 1点。打割・研磨・無加工品・ヘビ貝付着品有。 兼久式。	224		
54	マツノト遺跡		13	9								4	6	7	3		2										1	1					古墳後期6C～平安 10C(貝塚後2期)	完形1(北地区BⅡ区5層、内外研磨。外面一 部自然面)。破片1(G地区GⅠ区3層、内外面 研磨顕著。ほぼ筋無。兼久式。	225	
55	サウチ遺跡		2	2								1	1																				古墳後期 (貝塚後2期)	完形1(北地区BⅡ区5層、内外研磨。外面一 部自然面)。破片1(G地区GⅠ区3層、内外面 研磨顕著。ほぼ筋無。兼久式。	226	
56	長浜金久第Ⅰ		1	1																								1					7～9世紀 (貝塚後2期)	兼久式。B9区19層出土。有孔貝製品。殻頂部穿孔。	227	
57	長浜金久第Ⅳ		1	1																									自				弥生中期中葉～後期 (貝塚後1期)	5層上面サンプリング自然遺物資料。	228	
58	面縄第3貝塚	鹿児島県 大島郡伊仙町	1	1								1																					貝塚前4期後葉～ 後1期	1/4残。第2トレンチ1層。研磨。縄文後期～弥 生後期。	136	
59	住居貝塚	鹿児島県 大島郡与論町	5	5									5																				貝塚後期?	1/5・1/3・1/2残。写真のみ。	130	
60	宇佐浜B貝塚	沖縄県国頭郡 国頭村	4	3								1		3	1																		弥生中前期前半～ 古墳中期 (貝塚後1期)	表採未製品完形1点。若干研磨。TⅢ5G層B1 点(1/2残、研磨)。TⅢ2G1層A1点(破片、研 磨。TⅢOG1層A1点(破片1、研磨)。イモガ イ集積遺構1ヶ所。他にイモガイ製。タカラガ イ製品。	229	
61	アンチの上 貝塚	沖縄県国頭郡 本部町	1	1									1																				弥生中期中後半 (貝塚後1期)	1/3残。研磨。イモガイ科集積遺構5基。敲石兼 磨石集積遺構1基。	230	
62	具志原貝塚	沖縄県国頭郡 伊江村	5	5									3	1		1																	弥生中期～後期 (貝塚後1期)	多孔品1(穿孔部6、両側穿孔。研磨。一部自 然面。E3Ⅵ層)。完形3(研磨。表面鏡状文様。 M12Ⅱ層1点。D6Ⅰ層2点)。破片1(研磨。 小豆色と白色のコントラスト。E12GⅢ層)。貝 集積遺構7基(イモガイ4、イモガイ+イモガイ コガイ被覆1、マガキガイ2)。他にゴホウラ・ タカラガイ製品。棒状ハンマー1、鏝器。	231, 232	
63	ナガラ原東 貝塚		2	2								1		1															自					(貝塚1期後半～ 後2期)	破片1(V層、研磨)。詳細不明1(Ⅲ層)。5C 前半～7C前半。	216, 233, 234
64	ナガラ原西 貝塚		8	8									6	2		2																	弥生後期後半～ 古墳中期 (貝塚後1期後半)	多孔貝丸2点(殻頂打欠き後。穿孔カ所4、研 磨)。V層から2点重なる出土。紐でつらした か。完形4、破片2(1/2残)。研磨。イモガイ 集積1基。	235, 236	
65	ナガラ原 第3貝塚		2	2										1														1						弥生後期後半～ 古墳中期 (貝塚後1期後半)	破片1(1/3残、研磨、Ⅳ上層)。その他製品: 垂輪1点。イモガイ集積遺構2基。貝だまり2 基。大当原式。	234
66	大室原貝塚	沖縄県名護市	14	14									4	2																			弥生時代後期後半～ 古墳中期 (貝塚後1期後半)	3層(後1期):完形2(研磨虫食い1、研磨なし 荒削1)。形態不明1、挽品層(時期不明): 完形2(内孔荒削局縁研磨1)、破片2(弱い研 磨1、内面孔若干研磨1)、形態不明7。イモガ イ集積。大当原式。	153	
67	高知口原貝塚	沖縄県中頭郡 読谷村	2	2									2																				弥生～古墳	完形。研磨。	237	
68	伊礼原E遺跡	沖縄県仲頭郡 北谷村	1	1																														浜屋原・大当原式 (貝塚後1期)	弥中中～中後・古前～中。	238
69	伊礼原D遺跡		6	6									1	5																				弥生後期～古墳 (貝塚後1期)	完形1、破片5、研磨。大当原式主体。	239, 240
70	伊礼原遺跡		1	1										1																				弥生後期～古墳 (貝塚後1期)	SP30出土:破片1(外面研磨。内面一部研磨)。 貝集積3基。大当原式主体。	241
71	嘉門A貝塚	沖縄県浦添市	7	7									1	6													1						弥生後期後半～ 古墳中期 (貝塚後1期後半)	完形1、破片6(1/3～1/2残。うち外面に三個 または二個一組の縦位円形凹点列有1点)。イ モガイ集積2基。ゴホウラ集積1基。他にゴホ ウラ製腕輪。イモガイ・ゴホウラ製品。その他 外面装飾品1。大当原式主体。	242	
72	嘉門B貝塚		3	3									2		1																			弥生中期中葉～後期 前半(貝塚後1期)	未製品1(た24G第Ⅳ層、頂部打欠きのみ)、完 形製品2(せ20G1層、す20G出土、研磨)。他 にイモガイ・ゴホウラ製貝輪。貝殻集積遺構37 基(ゴホウラ13、アツツデガイ4、イモガイ1、 ヒメジャコ2、ゴホウラ+アツツデ2、ゴホウ ラ+イモガイ1、アツツデ+イモガイ1、ゴホウ ラ+アツツデ+イモガイ1)。	243
73	具志川 グスク屋下 埋葬址	沖縄県 うるま市	8	8									7				1																弥生時代後期後半～ 古墳中期 (貝塚後1期後半)	半環状品1点(G区表採、両側擦切穿孔5ヶ所、 研磨)。破片7(1/5、1/4、1/3、1/2、2/3残、 内面研磨。外面一部自然面有、被熱黒色1点)。 Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ下層出土。他にイモガイ製。タカラ ガイ製品。Ⅲ層下で埋蔵人骨(乾燥骨、焼骨、 火葬骨11体分、うち成人男性6、同女性2、不 明3)。	244	
74	平敷屋 トウナル 遺跡		17	14		2		1					4	13																				弥生中期中葉～後期 後期(貝塚後1期)	完形4、破片13点(1/5・1/4・1/3・1/2・2/3 残、内1点は被熱白色、平面亀甲状仕上げ1点、 片側一ヶ所穿孔2点)。他にイモガイ製・ゴホ ウラ製貝輪。タカラガイ製品。イモガイ集積7基。 ゴホウラ集積1基。	160, 245, 246
75	津堅貝塚		3	3									2	1																				弥生後期～8C前半 (貝塚後1・2期)	破片上部に2ヶ所穿孔。多穿孔貝丸か。研磨。 イモガイ集積8基。	247, 248
76	北原貝塚	沖縄県島尻郡 久米町	3	3										3																			弥生中期中葉～後期 前半(貝塚後1期)	1/5・1/4・1/2残。研磨。他にイモガイ製・ゴホ ウラ製貝輪。サラサバティ製貝輪が重なって出 土(組合せ式の状況を示す事例)。浜屋原式。	249	
77	清水貝塚		12	12									1	11																				弥生後期後半～古墳 中期(貝塚後1期)	完形1。破片11(1/4～1/2残)。入念な研磨。イ モガイ科貝集積遺構1基。大当原式。	250